



KU 九州産業大学美術館
Museum of
Kyushu Sangyo University



平成30(2018)年度文化庁「大学における文化芸術推進事業」
「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」の構築に向けた博物館マネジメント人材育成事業実行委員会
編集:緒方 泉(委員長・九州産業大学地域共創学部教授)
デザイン:小野 勝也(有限会社 フォース)
発行日:2019年3月30日
印刷:東洋紙業高速印刷株式会社



博物館が、人を育てる。

museum

平成30年度 文化庁
「大学における文化芸術推進事業」
実施報告書



「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」の構築に向けた博物館マネジメント人材育成事業実行委員会
(九州産業大学美術館、九州大学総合研究博物館、福岡市博物館、福岡市美術館、海の中道海洋生態科学館、
田川市石炭・歴史博物館、直方谷尾美術館)

本事業のねらい・趣旨

団塊世代が75才以上となる2025年を目途に、要介護状態になっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けられるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築が急がれる。そこで本事業は、博物館において高齢者の居場所と出番を創出していくために、これらが実現可能な人材を育成し、博物館が地域包括ケアシステムの一翼を担っていくことを目指す。このため、具体的には「博物館と医療・

福祉のよりよい関係づくり」をいち早く進める英国・米国の博物館調査を基に、博物館関係者を対象とした技術研修とともに、芸術療法、音楽療法、園芸療法、アニマル・セラピー、回想法等を取り入れた研修会を実施する。また、九州産業大学(文化芸術、地域づくり、教育、スポーツ健康科学分野の連携)を中心に地域博物館、医療・福祉機関が協働する新たな「博物館健康ステーション」の枠組みについても提案したい。

本事業の実施概要

1. 博物館マネジメント人材育成研修会の実施(展示制作、展示グラフィック、資料保存等の技術研修=学芸員技術研修会とともに、「記憶」に残る博物館資料を活用した芸術療法、音楽療法、園芸療法等の介護予防プログラム研修=連続講座を実施する)
2. 博物館健康ステーションの開設(学芸員技術研修会・連続講座修了生が参画したミュージアムカフェを開催し、高齢者の博物館における居場所づくりのプログラムを検討する)
3. 多言語学習教材の開発(介護予防プログラム実施や高齢者の出番づくりに当たり、正月や節句などの季節行事や農作業で高齢者に馴染み深い博物館資料(例えば、茶器、掛軸など)の正しい取り扱いを学ぶための多言語学習教材を作成する)

4. 「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」を進める米国・英国博物館との交流事業(英国・米国の博物館で実施される後期高齢者、認知症高齢者に対する先進事例を調査検証する)
5. 英国・米国博物館関係者を招聘した国際シンポジウムの実施
6. 日本の博物館における高齢者向け教育プログラム実態調査の実施(九州・沖縄地域を中心にアンケート調査を実施する)
7. 博物館マネジメント人材育成事業実行委員会の開催(実行委員会に次の3部会を設ける。①調査研究部会、②プログラム開発・評価検討部会、③教材開発部会)

本事業による人材育成の目標

博物館が高齢者の居場所と出番を創出していくためには、現職学芸員や学芸員有資格者(休眠学芸員)、博物館関係者はこれまで以上に保存管理、展示教育等のスキルアップはもちろんのこと、特に「記憶」に残る博物館資料を活用した各種療法を学ぶ事が重要になってくる。このため本事業では、美術館で芸術療法、歴史民俗博物館で回想法、動物園や水族館でアニマ

ル・セラピー、植物園で園芸療法などを学ぶ機会を提供し、それぞれの博物館で介護予防や生活支援等の新たな博物館の価値を創造し得る人材の育成を行う。また、現在博物館に従事していない学芸員有資格者(いわゆる休眠学芸員)についても育成対象とし、博物館が地域課題を解決する場として社会的な役割を獲得するために、広く啓発を図りたい。

本事業の社会的な役割、効果

博物館は地域の文化財を保存管理、調査研究し、展示公開する場所であり、地域の「記憶」を集積する場でもある。しかし、近年の社会教育調査では「国民の博物館利用は年1回程度」というデータがある。2020年の東京五輪では多くの訪日外国人が博物館を訪ねることが予想されるが、地域博物館までその影響は

期待できない。従って、今回実施する事業は、博物館が地域課題を解決する場として社会的な役割を獲得し、「医療・福祉のよりよい関係づくり」の推進から、地域包括ケアシステムの内、予防や生活支援で博物館の活用の幅を広げる効果が期待できる。

組織体制

実行委員会名簿

- 委員長 緒方 泉 (九州産業大学地域共創学部・教授)
副委員長 三島美佐子 (九州大学総合研究博物館・准教授)
委員 朝鳥 和美 (田川市石炭・歴史博物館・学芸員)
委員 市川 靖子 (直方谷尾美術館・学芸員)
委員 鬼本佳代子 (福岡市美術館・主任学芸員)
委員 松村 利規 (福岡市博物館・主任学芸員)
委員 三宅 基裕 (海の中道海洋生態科学館・運営本部展示部魚類課次長)

事務局名簿

- 事務局長 中込 潤 (九州産業大学美術館・学芸室長)
事務局次長 永井 浩一 (九州産業大学産学連携支援室・課長)
事務局員 吉田 公子 (九州産業大学美術館・准教授)
事務局員 林田 純一 (九州産業大学産学連携支援室・室員)
事務局員 小栗栖 まり子 (九州産業大学美術館・学芸員)
事務局員 三戸 丈治 (九州産業大学美術館・学芸員)
事務局員 四ヶ所 悦子 (九州産業大学産学連携支援室・室員)

学芸員技術研修会スケジュール

番号	研修内容・開催日	開催場所	講師
①	展示グラフィック 2018年8月9日(木)	鹿児島市立美術館	熊谷 淳一 (株式会社ノイエ)
②	資料保存 2018年9月3日(月)	Kitenビル コンベンションホール	木川 りか (九州国立博物館)
③	展示制作 2018年10月22日(月)	大分県立歴史博物館	洪 恒夫 (東京大学総合研究博物館)
④	照明技術 2018年11月20日(火)・11月21日(水)	浦添市美術館	藤原 工 (株式会社灯工会)
⑤	梱包技術 2018年12月17日(月)	福岡市博物館	ヤマトグローバル ロジスティクスジャパン(株) 九州美術品支店社員
⑥	博物館教育 2019年1月7日(月)	佐賀県立博物館・美術館	齊 正弘 (美術家、元宮城県美術館)
⑦	ユニバーサル・ミュージアム 2019年1月23日(水)	長崎県美術館	広瀬 浩二郎 (国立民族学博物館)
⑧	博物館リニューアルと照明計画 2019年2月12日(火)	熊本県立美術館	藤原 工 (株式会社灯工会)
⑨	著作権 2019年2月25日(月)	熊本市現代美術館	福井 健策 (弁護士、日本大学芸術学部)

平成30(2018)年度学芸員技術研修会日程一覧表

Contents

1 本事業のねらい・趣旨	01
2 本事業の実施概要	01
3 本事業による人材育成の目標	01
4 本事業の社会的な役割・効果	02
5 組織体制	02
6 学芸員技術研修会スケジュール	02
7 ① 展示グラフィック	03
② 資料保存	05
③ 展示制作	07
④ 照明技術	09
⑤ 梱包技術	11
⑥ 博物館教育	13
⑦ ユニバーサル・ミュージアム	15
⑧ 博物館リニューアルと照明計画	17
⑨ 著作権	19
8 連続講座	
① コラージュ療法	21
② 園芸療法	22
③ アニマル・セラピー	23
④ 回想法	24
⑤ 音楽療法	25
⑥ 医療・行政現場	26
9 高齢者教育アンケート	27
10 ミュージアムカフェ・バズ見学会	28
11 ICOM・九州産業大学ミュージアムカフェ	29
12 国際シンポジウム	30
13 英国調査	31
14 米国調査	32
15 「学芸道」多言語学習教材の開発 今年度の印刷物	33
16 概念図	34

博物館マネジメント人材育成研修事業
(学芸員技術研修会)

①「展示グラフィック」

■ テーマ

最近ではポスター、チラシ等広報物を予算の関係から学芸員が行うことが多くなっています。今回は視覚伝達効果が高い広報物を制作するための「キャッチコピー」「文字の配置・大きさ・フォント」「配色」「紙面構成」等について学びます。

■ 講師

熊谷 淳一（株式会社 ノイエ代表取締役）

■ 開催日時

2018年8月9日（木）10:00～17:00（9:30～受付開始）

■ 開催場所

鹿児島市立美術館（鹿児島県鹿児島市城山町4-36）

■ 内容

10:00 自己紹介 10:30 グループワーク1「他館のチラシデザインの相互評価」 11:00 講義1「チラシ作りの基礎1<チラシの4つの重要要素>」 12:00 昼食 13:00 グループワーク2「チラシの改善点を話し合い、修正ラフを描いてみる」 13:50 グループワーク3「チラシの改善点の発表」 14:55 休憩 15:05 講義2「チラシの添削」 16:10 講義3「展示グラフィックの基礎<展示パネルの制作ポイント>」 16:40 ふりかえり「今日は意味のある時間になりましたか」 17:00 終了

■ 受講者数

41名（福岡5名、鹿児島36名）

■ 事後アンケート

質問1

今回の研修会で熊谷先生の講義、演習（ラフ案作成）から学んだことは何ですか？

● 今回の一番の学びは、コンセプトが重要ということでした。

今までは特に何も考えず、ターゲットも決めず、ただただこのような展示会しますよ！というチラシを作っていたのですが、それが全然だめだと気づきました。今後はコンセプトをしっかりと話し合い、ラフを作る作業をしたいと思います。

● 「魅力」をどう伝えればよいのか。そのためには、しっかりしたマーケティングが必要である。このことを理解せず、入館者数の増減を語っていたと思う。公の施設では、このような商売としての視点に欠けていたことがよく分かった。

● 展示グラフィックの基礎について学んだ。チラシやポスターを作成する際には、メリット、コピー、デザイン、個性の4つの重要な要素があり、それぞれの意味とそれらの重要性について学んだ。

● 印刷物や解説パネルの作成では、ターゲットとなる来館者のニーズや来客を引き込むセールスポイント、展示のコンセプトがデザインの柱となることを踏まえ、常に顧客目線でデザインに取り組むことが必要であることを学んだ。

質問2

今回の「展示グラフィック」の研修を受けて、今後、自館はもちろん、他館の印刷物、解説パネル、キャプション等の展示グラフィックで注目したいポイントは何ですか？

● 配色とフォントと全体に雰囲気のパランスがとれているかに注目したいです。

● 自己満足や館の職員のみを気にしたものを作るのではなく、来館者に目を向けたものを作るのが重要なポイントと感じた。真に来館者を呼び込むものを作りたい。

● 一般の人々にとって、「行ってみたい」「楽しみ」と思わせるようなデザイン、タイトル等の構成となっているかどうか。来館者の目線に立ったデザインとなっているか。

● 他館のチラシを自館にも置いているので、来館者がどのようなものを手に取るか、興味を持ってもらうかという反応をみて、それがどういったデザインや内容であるのか比較してみたい。

● まずは、書体・色・配置などが特別展のコンセプトに合っているか、あるいは世界観と合っているかについて注目していきたい。今回の講義で学んだように、例えば色の明るさや彩度で人が受ける印象はある程度共通であるということが分かった。そのため、まずは資料を見直ししながら、世界観にふさわしい書体や色を選択できるようにしたい。

質問3

評価シートやマトリックスは今後どのように活用したいですか？

● 企画展等のチラシやポスターをはじめとする印刷物及び、キャプション等のデザインを決める際に、企画展テーマに合わせ、統一感を持たせるために使用したいと思います。また、その後の周囲の同意を得る為のツールとして活用できればとも思います。

● 今までなんとなく作っていたが評価シートでデザイン案を客観的に評価し、外の目を大切にしたいものにするように活用していきたい。

● 各デザイン案については、担当学芸員任せになっている部分が多い。今後、館内で共有して、よりよいデザインにするために相互評価を取り入れてみたい。

● 部署内で客観的な評価がほしいときや、外部の業者に委託する際の指標として用いたい。

● 「キレイで読みやすい…」などというあいまいな基準でこれまでチラシを評価していたため、出来上がったチラシの評価用として、また実際に作る前に資料として使いたい。更に、他の職員への研修でも使いたい。

● 少人数でグラフィックを考えることが多いため、特にデザインに迷いが多いときなど、シートやマトリックスを活用して客観的な見方やどのような方向性で作るかを明確にすることに役立ててみたいです。

質問4

今回の研修会について、参加して良かったなあと思う点があればお書きください。

● 過去の書式データに、画像や文字データを上書きして作成したチラシが、何年も続いていた。これまでの既成概念を打ち破り、個性的なものにするためには、勇気が必要である。その勇気となる基本的な要素を今回の研修でいただいた。

今回の研修を受けたことで、今後のポスター、チラシ等がきっと変わると思う。

● 今回展示グラフィックに参加することで、自らの担当する館のチラシやポスターには改善すべき点があるということがよく分かった。また、公営・民営を問わず博物館・美術館の担当者に関わり貴重なお話を聞くことができた。

● これまでこのような具体的な研修会に参加することがなく、チラシについて明確な基準で評価、作成できるようになったことが一番の収穫でした。

また、チラシに必要なことは、その他の展示やイベントでも必要な要素がたくさん含まれていて、これからの展示やイベントで活かそうと思いました。

また、歴史系など他分野の専門の方と一緒に仕事をする機会がなかなかなかったので、とてもいい刺激を受けました。

● チラシ作成の研修は他にも（市町村研修所など）で受講したことはありますが、今回は展示会チラシに特化した研修だったため、一般的な行政文書としてのチラシとは一線を画すものとなりました。逆に、学んだノウハウは他の行政文書でも活用できそうです。また、少人数のグループワークという点も意見を言い合うことができ、他館の方とも知り合いになれ、よかったです。



博物館マネジメント人材育成研修事業 (学芸員技術研修会)

② 「資料保存」

■ テーマ

「科学の力、人力で博物館資料を守る」をテーマに、「展示環境、収蔵環境では何に気をつけたらよいか」「光、汚染物質、虫、カビにどう対処するのか」「災害時にどう対応するか」などを木川先生の講義と参加者が持ち寄った事例から学びます。

■ 講師

木川 りか（九州国立博物館学芸部博物館科学課長）

■ 開催日時

2018年9月3日(月)13:00～17:00(12:30～受付開始)

■ 開催場所

Kitenビル コンベンションホール(宮崎県宮崎市錦町1-10)

■ 内容

13:00 自己紹介、「資料保存」の悩みの共有 13:30 講義「科学の力と人力で博物館資料を守る」

15:00 休憩 15:15 事例研究「参加者が持ち寄った事例を木川先生が診断する」 16:40 ふりかえり「今日は意味のある時間になりましたか」 17:00 終了

■ 受講者数

41名(福岡4名、熊本1名、鹿児島1名、宮崎35名)

■ 事後アンケート

質問1

今回の研修会で木川先生の講義から学んだことは何ですか？

● 木川先生の講義を受け、適切な資料保存の為には、

現場で実務に携わる学芸担当者だけでなく、管理部門や他の部門の担当者にも理解を得られるように努力し、協力を仰ぐ大切さを学びました。そして、日々の努力次第で人力でも未然に予防することは出来るということを知り、希望が持てました。

また、いざという時の相談先を資料の特性ごとに事前に確保し、緊急時の対応方法を準備しておく必要性を強く感じました。

● カビや害虫が、資料や人体に想像以上に悪影響を与えるという事を学び、これまで資料保存に対し、いかに認識不足であったかを思い知りました。

九州国立博物館では施設や科学の力だけでなく、職員の方々の人力による涙ぐましい努力の結果、貴重な資料が守られていることを知り、当館も今すぐできることから対策を実行に移す必要があると思いました。

● 管理すべき具体的な数値や方法、虫ごとの被害の特徴など、参考にすべき情報をたくさん提示していただき、非常に勉強になりました。なにより、先生の講義を聞いて安心したと言いますか、木川先生が各施設の悩みに対して熱心に対策案を考えてくださって、悩んでいるのは自分だけではないと思えたことと、何かあった時、いろいろな人からアドバイスをもらえれば、なんとか解決できそうだなと思えたことが、得たものとしてとても大きかったと思います。施設の運営がメインの業務ではないため、なかなか毎日向き合うことはできないので、開催される時は参加して、最新の情報に触れておきたいと思っています。

● 資料の保存に関しては、特に衝撃的だったのが、資料に生じるありふれた黒カビの人体に対する悪影響の

レベルが想像を超えていたことです。資料は大切だから残したい!という感情が先走りがちだが、資料を保存していくための作業や環境整備には、科学的に冷静に分析して準備したり、経過を厳しくチェックしたりしていく行動が不可欠なのだということを知りました。

質問2

今回の研修会で、美術館、図書館からの質問コーナー(事前に受け付けた質問に木川先生が答える)を設けました。木川先生の回答から気づいたことがあればお書きください。

● 今回、事前に質問を受付けて下さり、誠にありがとうございました。先生のご回答から当館は、建物や展示ケースの仕様により、展示ケース内においても外気の影響を受けやすいということが分かりました。空調も博物館施設仕様ではないため、今後も温湿度に気を配り、空調をこまめに調節することで、適切な温湿度を保てるように努力していきたいと考えています。

● カビや害虫から、自分たちの健康被害を防ぐためにも、作業中には防塵マスクや帽子、手袋、防護服などが必須アイテムであることを知りました。

「展示ケース内の温湿度が対策を講じているのに一定しない」という質問に対し、ケースが館外の排気ダクトと通じているのではという指摘がありました。このことから、館の構造をよく知っておくべきであるのだと思いました。また、当館にも古い郷土資料や16ミリフィルムの所蔵が多く、他館と同様に修繕や保管の仕方に頭を悩ませていますが、素人ができることには限りがあり、専門業者に頼る、講習会に参加するなどの方法があることを知ることができました。

● 他館の状況と自館の状況をあてはめて考えることができました。事例にあった専門機関や講座、HPの情報など、的確に教えて頂き、視野が広がりました。

● 映像資料のフィルム類やマイクロフィルムの保存の難しさ。一旦劣化やカビが生じたら元に戻すのは困難だと再認識した。そうなる前の保管環境がいかに大切かを知りました。しかし、それらの保存や修復について相談できる機関があると分かって少し安心しました。

質問3

今回の「資料保存」の研修を受けて、今後、自館で早速取り組みたいことは何ですか？

● 当館は、給湯室が収蔵庫・展示室と同じ階にあるため、早速、虫害予防として蓋付きのゴミ箱を購入するよ

うにします。

また、他にも最低限必要なものとして説明があった、使い切り防塵マスクとニトリル手袋(パウダーフリー)も購入し、万が一カビが発生した場合に備えたいと考えています。

● まずは、できる範囲の温湿度管理をしていきたいです。特に、閉架書庫は気密性が高いので、講義の中でもあったように、可動式の書架は閉架前に均等に隙間を開けたいです。開架の棚についても、埃がたまらないように、こまめに掃除するように心がけたいです。すでにカビが発生している資料については、できるだけ早く隔離したいと思います。

また、利用者からの古い資料の寄贈は、カビや害虫を入れられないよう受入れしていきたいと思っています。現時点でできることは限られていますが、他のスタッフにも同様の認識を持って協力してもらえよう、日々努力していかなければと思いました。

● 職員にデータロガーの購入を打診してみました。害虫カードも購入したので、状況を説明する際にコンクリートほぼ打ちっ放しの書庫で、壁伝いに書架があり、本が収蔵されているのでその撤去と、かび臭さを感じていたので送風等取り組んでみたいと思います。

● 巻ダンボールや、箱の整理(ムシのえさとなる、ダンボールや紙)、とびらの隙間をうめていく、ケース下の確認と徹底清掃から始めたいと思いました。改めて、整理したものやその理由を職員間で共有して、協力してもらうことが大切だと改めて気づきましたので、仲間を増やしていけるように頑張りたいと思います。

● 私は温湿度計の管理を担当していますが、恥ずかしながらこれまでざっと目を通す程度のルーチンで対応していました。今回の研修会でそれを反省しました。チェックポイントごとの差や、週ごとの差異、また前年との差異まで細かく見渡す目を持つように心がけます。

● 有害生物管理用のトラップ、温湿度管理など、やっていることは知っていても内容を理解していない取り組みが多いと分かりました。総合的に理解し、問題点をシェアしていく場を持つようと考えています。



博物館マネジメント人材育成研修事業
(学芸員技術研修会)

③「展示制作」

■ テーマ

「作品リストはできたけれど、これらをどう展示しようか?」「分かりやすい展示とはどんなものなのだろうか?」と日々思案する皆さん。今回は大分県立歴史博物館の展示会を事例に、「展示会の作り方」を講義、グループワークを通じて学びます。

■ 講師

洪 恒夫(東京大学総合研究博物館特任教授)

■ 開催日時

2018年10月22日(月)10:00~17:00(9:30~受付開始)

■ 開催場所

大分県立歴史博物館(大分県宇佐市大字高森字京塚)

■ 内容

10:00 自己紹介、「展示制作」の悩みの共有 10:30 報告「展示会の作り方-大分県立歴史博物館を事例として-」(村上博秋主幹研究員) 11:10 「特別展 福澤諭吉-独立自尊へいたる道-」会場見学(村上博秋主幹研究員) 12:00 昼食 12:50 グループワーク1「展示制作のココはいいなあ【I like】、ココはこうしたいなあ【I wish】というポイントを検証する」 13:20 グループ発表 13:55 講義「展示会の作り方」で留意したいこと(洪恒夫先生)

15:05 休憩 15:20 グループワーク2「たくさんの気づきから湧き上がる疑問を話してみよう」 15:35 演習「洪先生に何でも相談してみよう」 16:10 グループワーク3「新たな気づきをもとに、もう一度展示会を見てみよう」 16:50 ふりかえり「今日は意味のある時間になりましたか」 17:00 終了

■ 受講者数

29名(福岡12名、大分14名、東京都1名、北海道2名)

■ 事後アンケート

問1

今回の研修会で洪先生の講義から学んだことは何ですか?

● 建築設計の際に平面プラン(間取り)の組立てを考えるように展示会を設計すること、またホワイトキューブをベースに考える枠組みを飛び越えてどこまでデザインを作り込めるかの「挑戦」の方法・着眼点を学ぶことができました。また、実務では、展示プランのエスキースをすること、またデザイナーに適確な仕様を示す作業で活かすことになるとは思いますが、洪先生のようなフリーハンドで実行できる実験的な取り組みまでは難しくても、終盤に行った洪先生を交えた現場でのディスカッションで示された指摘内容からでもコツコツ実践に活かしていこうと思っています。



● 展示をつくる側の留意事項を再確認しました。まず、自分のミッションを明確に立てること。留意すべき事項としては、①他人事を自分事化にするための接点を作ること②1つの資料をいろんな側面で見せることで興味を引かせ広がりを作ること③簡潔で分かりやすいこと。展示を構成する時に、順序立てて一つ一つのポイントをきっちり押さえ、楽しませる展示を考えていこうと思いました。

● ①展示会は「おもてなし」ということは目からウロコだった②中景・近景・遠景での見せ方などは意識していなかった③展示をするときに「展示の目的」を明文化し、それが迷ったときの判断基準になることを学んだ④「自分事化」とすると関心を持ってもらいやすいことを知った。

質問2

今後展示会を企画するに当たり、大分県立歴史博物館の展示会「福澤諭吉展」を事例にしたワークショップから活かしてみたいことは何ですか?

● I like, I wish を今後の展示作成、業務の効率化に役立てていければと感じた。(グループワークを通じた他者とのコミュニケーション)

● 村上さんが説明された展示会の組み立て方を参考に、どのように対象とするテーマを伝えるために章立てや構成を考えていくのか取り組んでいきたいと思っています。

● 子ども用のキャプションを積極的に作っていこうと思います。通りすぎても結構です、くらいのメリハリをつけた内容を考えてみようと思います。もっと奥深く知りたい方用の展示にも配慮し、興味を引くようなストーリーを展開して、見る側の意識で展示制作していきます。

● 今回、展示に対して複数人で客観的に意見を出し合うことで、新たな視点や改善点が見つかった部分があったので、自館の展示でも活用できればと思います。

質問3

今後、他館の展示会を見学する時に、どんなところに注目したいと思いますか?

● 展示趣旨に沿った展示構成、展示順になっているか
● 導線はある程度わかりやすいか、サイン表示は展示解説等に埋もれずにわかるか

● 解説パネル及びキャプションのデザインは展示内容や会場の雰囲気にあっているか

● 解説パネル及びキャプションの文字量、文字の大きさ、文字間隔、フォントは適当か

● 解説パネル・キャプションのデザイン・配色は色覚障

がい者・高齢者への配慮が感じられるか

● 解説パネルは絵や図、表、アイソタイプを使用するなど理解を促す工夫をしているか

● 解説パネル及びキャプションのデザイン性を重視しすぎて、見づらくなっていないか

● 子ども向けの解説はあるか

● 解説パネル及びキャプションにふりがなや注釈をつけるなど、わかりやすさに配慮しているか

● 解説パネル及びキャプション、資料の設置位置は適切か(見やすい位置か)

● 演示具・ケースなどの角がとがっていないか、安全対策はほどこされているか

● 監視員がうまく監視できるよう配置しているか、また、限られた人員(監視人数)の場合、展示構成(配置)段階で、監視を視野にいれているか

● 車いすの場合、近くによって展示を見ることができるか

● 資料に負荷をかける展示手法となっていないか

● ケースや露出展示資料、演示台等にほこりがのっていないか、手垢がついていないか

● 展示照明は適切か、見やすいか、色温度は展示の雰囲気にあっているか、資料に対して適切か

● 展示資料数と解説パネル数はバランスがとれているか

● 展示台と展示資料の配色がうまくいっているか

● 貴重資料(ぜひみてもらいたい資料)がわかるようになっているか(演示台の色等に配慮しているか)

● 展示や解説の強弱はあるか(コラム的なものを設けるなど、骨休め的な話題をもちこむ工夫をしているか)

● ハンズオン展示等触れる展示(体験できる展示)はあるか

● 展示資料の力(作品の魅力)に頼っただけの展示になっていないか

● 全体として来館者に対しての配慮があるか。また、さまざまな立場の来館者を想定した展示になっているか。

● 展示資料、文章含む展示会のすべてにおいて、だれかを不快にさせたり、心を傷つけたりするものになっていないか

博物館マネジメント人材育成研修事業
(学芸員技術研修会)

④ 「照明技術」

■ テーマ

「毎回、展示照明は悩むよなあ」「LEDの選び方は？」という皆さん。今回は照明の基本知識を学んだ後、ハロゲン電球、LED等を用いた作品を魅せるための展示空間づくりについて、グループワークを通じて学びます。

■ 講師

藤原 工 (株式会社灯工舎代表取締役)

■ 開催日時

2018年11月20日(火)10:00~17:00(9:30~受付開始)、
21日(水)9:40~17:00

■ 開催場所

浦添市美術館(沖縄県浦添市仲間1-9-2)

■ 内容

【1日目】10:00 開講式、自己紹介 **10:50** 講義1「照明の基礎を知る-LEDを使って展示空間を作る」
12:00 昼食 **13:00** 講義2「展示計画の基礎」
14:00 グループワーク1「LEDを使って展示空間を作る」
15:30 グループ発表1「工夫した照明演出について発表する、藤原先生の講評」 **16:00** グループワーク2「講評を踏まえて、照明演出を再構成する」 **16:50** まとめ
17:00 終了
【2日目】9:40 昨日のふりかえり「本日の照明作業の目標設定」 **9:50** グループワーク3「グループの展示空間

をまとめる」 **10:50** グループ発表2「昨日の課題を踏まえ、工夫した照明演出について説明する、藤原先生がグループの展示空間を評価解説する」 **11:20** グループワーク4「立体作品の照明を考える」 **12:00** 昼食
13:00 グループワーク5「展示空間全体の照明演出をつくる」
14:00 「藤原先生の講評」 **14:50** 休憩 **15:00** 講義3「ここは押さえておきたい『照明の基礎知識』」、「質疑応答」 **16:50** ふりかえり **17:00** 終了

■ 受講者数

34名(福岡4名、沖縄29名、東京1名)

■ 事後アンケート

質問1

2日間の実習で学んだ照明技術(考え方、ちょっとした工夫)は何ですか?

●照明の演色性についてよく知ることが出来ました。進化の早いLEDライトですが、その方式によって、さまざまな特徴と特性があり、展示用の照明に使える物と使えない物があるということを知り、実験によって展示品の見え方も変わってくるというのを実感しました。照明を使って展示空間の演出の仕方にもいろいろな方法があること、また、展示への影響力を藤原先生の取り組みを通して、知ることができました。実習を通して、照明は意図を持って行いますが、その意図が展示や観覧者の邪魔にならないようにする難しさも感じました。



●照明技術について一から学んだと感じています。自学自修や学芸員資格取得の過程においても、保存のことに偏りすぎていたのだと気付くきっかけとなりました。基礎である光の特性、人間の目の特性、そして作品の表現方法と全ての面で大変勉強になりました。しかも、保存の事に偏っていたはずなのに、新技術であるLEDからのダメージについて見落としがあることも発見でした。当施設では照明器具を建物管理の課が導入しているため、人任せになっていた部分がありました。反省して全てに精通するよう研鑽を積んでいきます。

●絵画の照明実習時に、照明が明るければ必ずきれいに見えるわけではなく、絵画などはライトを当てすぎると逆に粗が目立ってしまう場合があることを先生に指摘され、展示照明の奥深さ・難しさを感じました。展示の意図や作品の雰囲気によって演出を考えていくことが大事だと考えさせられました。また、「保存のための光」という意識も忘れてはならないと感じました。これまで「染織や紙類は光に弱い」という漠然としたイメージはありましたが、照度や色温度の具体的な数値までは意識が向いていなかったため、保存していくための照明について具体的に考えるよい機会となりました。

●何から何まで、初めての事でした。学芸員資格取得の際に、光量の基準など教わったはずではあったんですが、恥ずかしながら、展示室で光量を測ることも満足にできていませんでした。器具にしても、LEDの選び方から、実際の使い方、空間の演出の仕方まで実践で学ぶことができ、非常にためになりました。

質問2

今後、自分たちの館で試してみたい照明技術は何ですか?

●今回、講師の藤原先生のお話や実習を通して、カッターライトを用いたピンポイントな照明に取り組んでみたいと思いました。仏像の目に微かな光を入れたり、錫杖の影が本体にかからないようにするなど、これまでになかった発想に触れることができました。また、1班が絵画に使っていたカッターライトの照明も印象的でした。また、自館にはハロゲン光源のスポットライトしかないため、まずは演色性の高いLEDライトを導入したいと思いました。高温になるハロゲンランプではフィルムフィルターを使用した調光や色温度の調整はなかなかしにくいので、ぜひ取り入れたいと思います。

●色温度に変化をつけて時代の変化を意識させる展示を行ってみたいです。

●現在、当館の展示ケース内は直管LEDのみを使用しているのですが、少し単調な印象に感じています。スポットライトや拡散シートも取り入れて、雰囲気作りを図ってみたいです。

また、当館では陶器から象牙まで様々な素材の資料を展示しているので、照度計も使い、光による影響を最小限にとどめられるよう細心の注意を払いたいと考えています。

●自分の扱う自然史資料は区分でいうと非常に光にデリケートなモノなので、まずは照明の光量の見直しから図りたいと思います。その上で来館者が見やすい照明計画を、色温度なども含めて練り直してみたいです。

質問3

今後、他館の照明を見る時に、どんな点を気にかけて見ますか?

●照明で会場全体の雰囲気をどのように作っているのかという点に着目したいと思っています。個々の作品に当てている照明もそうですが、その他の会場の明るさや暗さを演出するための照明をどのように行っているのか、その照明が雰囲気作りにもどのように寄与しているのかなどを考えてみると展示自体をまた違った見方ができるのかもしれない。

また、どういった機材を使用してその照明を行っているのかを意識することで、自館でも参考に出来る場合には取り入れていきたいと思っています。

●研修以来、自館でも他館でも照明が気になり展示を見る癖がつかまりました。その時は、光量や眩しさ、観覧者の映り込みに全体の統一感等様々ありますが、一番は展示テーマに則した照明になっているかということだと感じています。

●展示のテーマや展示物によって、照明器具の使い分けや演出がどのように変わってくるのか注目したいと思います。

●上ばかり見るかもしれませんね(笑)。数や角度・照明の種類など細かい部分を見ることになると思います。お話を聞く機会があれば、どの様な工夫をしているか等も聞いてみたいです。

博物館マネジメント人材育成研修事業
(学芸員技術研修会)

⑤ 「梱包技術」

■ テーマ

「仏像の梱包はどこに注意すればいい?」「紐の結び方って何回やっても覚えられない」「掛軸を巻くと、いつもタケノコみたいになる」等々、作品の取り扱い方、梱包・開梱の仕方について、体験を通じて学びます。

■ 講師

ヤマトグローバルロジスティクスジャパン(株)
美術品輸送カンパニー 九州美術品支店社員
(美術品梱包輸送技能取得士)

■ 開催日時

2018年12月17日(月)10:00~17:00(9:30~受付開始)

■ 開催場所

福岡市博物館(福岡県福岡市早良区百道浜3-1-1)

■ 内容

9:30 受付 10:00 自己紹介・事前説明 10:30 研修開始(Aグループ「梱包材、仏像の頭・手の梱包」、Bグループ「掛軸と茶器の取り扱い、仕覆の紐かけ」)
12:20 昼食 13:20 研修再開(A/Bグループ交代)
14:50 休憩 15:05 「これはどう梱包するの?」サプライズ梱包(博物館側で予め準備し作品2点について、講師が即座にどう梱包するかを見学する。*箱の作り方*綿枕の作り方などを含む) 16:05 休憩
16:15 質疑応答 16:45 ふりかえり 17:00 終了

■ 受講者数

35名(福岡17名、熊本7名、佐賀1名、長崎1名、鹿児島3名、広島2名、岡山1名、京都1名、東京2名)

■ 事後アンケート

質問1

今回の研修会から学んだことは何ですか?

(例、複数名で行う場合は「声かけをする」など)

● 技術的なノウハウも勿論ありますが、初見の観察の大切さを痛感いたしました。型にはまった手順を遂行するだけでなく、資料の状態をしっかりと認識してから取り扱い始めるといことがどれだけ重要かを思い知りました。最初に資料を見る際には、見られているということもあり緊張してしまう事が多いため、一層気を付けて注意深い観察を心がけていきたいと思えます。

● 梱包の基礎技術を学ぶことができました。梱包材の扱いについて、梱包前の確認の必要性、空洞や隙間がある部分は弱いため隙間を埋めること(ただしクッション性に注意すること)、梱包時もそうだが、開梱時にも衝撃がかかるため開梱・梱包時には2人で作業を行うこと、掛け軸・茶器の扱いの方法等。

● サプライズ梱包では、どうやって梱包するのか見当もつかない作品が出てきて驚きましたが、講師同士で話し合いながら丁寧に作業を進めていく様子を見て、作品を安全に取り扱うためには技術面は勿論のこと、適切なコ

ミュニケーションも必要だということが分かりました。

● 作品の安全が第一であるとともに、作業の効率を考えた所作や、作品に関わる人への心遣いが大切だと学びました。梱包の前に作品を観察する、「壊れた部分があるところ」とおっしゃっていましたが、所属する上野原縄文の森(鹿児島県)で扱うものは、修復した土器類がほとんどです。特に注意して観察を行わなければいけないと学びました。

また、業務の一部と感じていた「梱包」という作業でしたが、学習映像教材「学芸道」でも紹介されていたように、作品を第一に、所作や他人への心遣いなど、武道に通じるように感じ、そのような仕事をされているヤマトグローバルロジスティクスジャパン(株)の皆さまが、とても素敵でした。

質問2

今後の梱包作業で活かしてみたいことは何ですか?

● 資料の状態によって梱包を考えること。→掛け軸の戻し方(タケノコになりにくい方法)。ただし、巻きぐせの付いているものは破損の恐れがあるため無理に正さないことも重要。それぞれの結び方は練習あるのみということを実感しました。

● 今まで周囲から与えられるものから保護すればよいという安直な考えが先行していた為、梱包を行う際・解く際にかかる負荷を失念していました。今後は資料の状態を見ながら修理箇所や脆い箇所などを保護し、安全に梱包することを心がけたいです。

また、自分以外の人が紐解くことを考えて前後がわかる様にすることや注意事項を記載することなど、次にバトンタッチすることも考えて作業に付与していきたいと考えております。

● 図書館内の文化財担当が自分一人のため、梱包も一人で行うことが多かったが、他の職員に協力を要請して2人以上で行うように、本日の学んだ内容を周知することも含め、活かしていきたいです。

● 作品の状態や梱包の際の注意ポイントが分かったので、これからの作業員さんとやりとりをするなかでより正確な輸送プランを計画できそうです。

また、梱包技術は一朝一夕で身に付けられるものではないことも今回の研修で実感できたので、学んだ所作を忘れないよう普段から練習を繰り返したいと思えます。

質問3

昨日の実際の作業から、「梱包材」「仏像」「茶器」「掛軸」について、それぞれの取り扱いに必要な所作に関する「動詞」(例えば、添える、引き出すなど)を書き出してください。

● 「梱包材」

- ① 裂く、切る、しごく、結ぶ、丸める、包む、貼る
- ② 破る、しごく、調整する、やわらかくする
- ③ 見る、裂く、撚る、揉む
- ④ 確認する、裂く、しごく、撚る、丸める、添える、包む、結ぶ、しまう

● 「仏像」

- ① 見る、話す、丸める、挟む、覆う、包む、縛る、支える
- ② 確認する。意思疎通する。なだらかにする。うめる。巻く。結ぶ。
- ③ 確認する、伝える、役割を決める、梱包材を作る、置く、添える、包む、結ぶ
- ④ 観察する、確認する、支える、結ぶ、挟む、覆う、埋める

● 「茶器」

- ① 開ける、丸める、うめる、包む、閉める、結ぶ
- ② ほどく、開ける、置く、確認する、持ち上げる、置く、作る、包む、しまう、結ぶ
- ③ 見る、引き上げる、支える、埋める、包む
- ④ ほどく、引き出す、包む、埋める、結ぶ

● 「掛軸」

- ① 取り出す、のばす、掛ける、下す、止める、しゃがむ、巻き上げる、立つ、まわす、巻く・挟み込む、なおす
- ② 開ける、押す、置く、ずらす、スライドさせる、正面を向ける、掴む、持つ、外す、ほどく、はさむ、ひきだす、引き延ばす、かける、止める、しゃがむ、巻く、折りたたむ
- ③ 支える、引く、伸ばす、巻き上げる、畳む、掛ける
- ④ 滑らせる、解く、開く、確認する、掛ける、おろす、しゃがむ、整える、立つ、巻く



⑥ 「博物館教育」

■ テーマ

「美術とは『ビックリ』することである」、そして「博物館教育とは自立した個人を育成するものである」と話す齋正弘先生。米国留学をもとに、帰国後の宮城県美術館における長年の実践事例や佐賀県立博物館・美術館の探検を通じて博物館教育の意味を考えます。

■ 講師

齋 正弘 (美術家、元宮城県美術館教育普及部長)

■ 開催日時

2019年1月7日(月)10:00~17:00 (9:30~受付開始)

■ 開催場所

佐賀県立博物館・美術館 (佐賀県佐賀市内1-15-23)

■ 内容

10:00 自己紹介 10:20 講義1「学校教育と博物館教育の違いを考える」 11:10 演習1「齋先生と佐賀県立博物館・美術館を探検しよう」 11:40 昼食 12:40 講義2「博物館教育プログラム企画の意味を考える」 13:30 グループワーク1「これまでをふりかえり、齋先生と質疑応答してみよう」 15:35 休憩 15:45 演習2「もう一度、齋先生と佐賀県立博物館・美術館探検をしてみよう」 16:35 ふりかえり 17:00 終了

■ 受講者数

22名(福岡11名、熊本1名、佐賀5名、長崎2名、大分1名、鳥取1名、京都1名)

■ 事後アンケート

質問1

今回の研修会で齋先生の講義・演習で学んだこと、びっくりしたことは何ですか？

●美術館・博物館は学校では出来ないような体験が求められるというのは、頭では分かっている、では実際にどのようにそういった機会を設ければ良いか悩んでいました。しかし今回、先生の講義や演習を受けて、言葉かけや見せ方の工夫次第で、日常の何気ない場所から発見の楽しさを味わうことが出来ると実感できました。空調の吹き出し口をガイドに活用する発想は無かったので、今度自分の館でもやってみたいです。

また、齋先生の話し方も勉強になった。ユーモアのある語り口で、聞いている側の緊張を和ませる感じがしました。普段の自分の話し方を改めて振り返る機会にもなりました。

●博物館教育というと「教える」「ゴールを目指していかに向かうか」ということに重点をおいて、寄り添って活動するという視点がなかったのではないかと改めて気づきました。

また博物館で、子どもの年齢に応じたリアルさで伝えるためには、頭をもっと柔軟にし、博物館でのプログラムを考える必要があるとも感じました。

●建物に吹く風の流れる感じること、博物館教育であることに驚きました。知識や情報を一方的に押し付けるのではなく、子どもたちが自ら発見したり、考えたり

できるようなプログラムを作りたいです。

また、岡田三郎助の展示室にて、齋先生が「鼻のあたまを見てごらん」の一言で絵の見方ががらりと変わったように、日頃から引きだしを増やし、専門家ならではの声かけをできるようにしたいです。

●「鑑賞とは新たな知識を身につけることではない」、「ワークショップは“気の利いた図工体験”ではない」など、何かを教えなければならないという感覚から、改めて博物館教育の性質を確認し、軌道修正のきっかけになったと思います。特に先生と実際に美術鑑賞の体験を通して、自由に自分の発想で鑑賞するという難しさや、教えてもらう教育に慣れてしまっていることを実感しました。

また、子どもが聞き取りやすい声の周波数があることや、子どもの「なぜ？」が分からないと聞き流してしまうことなど、子どもと接する上でのポイントも為になりました。

●「教育普及とは何であるか」という本質的な部分を考えることのできる研修でした。単に学校や親の要望に応えることを目指すのではなく、学校でできないことをする、というのは改めてハッとさせられる言葉でした。

質問2

グループワークの意見交換から、どんな気づきがありましたか？

●小学校団体の社会科見学では、どの館も「学校が館にくる明確な目的(学習目標)がないとなかなか来てくれないので、それに合わせようとする学校の授業のようになってしまう」、「授業時間の関係で『40分で案内してほしい』など、時間的な制約があり、一方的に説明して終わってしまう」など、どの館も博物館教育と学校教育のギャップに悩んでいることが分かりました。また、バックヤードツアーや博物館資料以外にも、建物自体の魅力などの館の魅力を発信し、授業以外でも子どもたちが気軽に遊びに来たくするような工夫が必要だと感じました。

●どの施設も、もっと自分たちの思う内容を自由に実施したいけれど、見せられる成果物を完成させることを保護者が期待しているなど、同じ悩みを抱えていることを知りました。

しかし、そこから少しでもより良い体験をしてもらうために、今回齋先生が行なった美術館探検をワークショップやイベントの導入に使うと良いのでは、といった改善方法を提供し合い、今後の展開を想像することができました。

●「齋先生のお話が哲学的過ぎて、現場にどう落とし込めばいいのか…」というご意見を聴いて、「今日の研修会はリベラルアーツの訓練だったのだ!」と、改めて気づきました。

質問3

今回の研修会について、参加して良かったなと思う点があればお書きください。

●「子どもたちが主体的に活動できる投げかけをどのように行っているか」「学校とは違う、美術館ならではの要素がどこにあるのか」という点に注目したい。

また、今後自館でガイドを行う際は、作品の説明に終始してしまっていないか、きちんと子どもたちに“発見の機会”を提供できているかを常に意識していきたい。

●自館で行っている「バックヤードツアー」や「博物館たんけん」など通常行っている活動について担当者の意識や声かけを変えることで、参加者にどのような変化が現れるのかが注目したいポイントかと思いました。

また他館の教育活動は、講師が「teach」や「interpreter」「facilitator」などどういった立場で参加者に向き合っているのかを注目したいと思います。

●以前小学校の先生に「生活科」「社会科」「総合的な学習の時間」であれば校外に出やすいと言われたため、「教育プログラム」を学校に紹介する時に、教科との結びつきを強調しているのか、他館の動きを知りたいです。

●子どもたちと同じ周波数になるためにどうすれば良いのか、それが今後の目標となりました。まずは、今まで実施したワークショップの見直しをすることで、少しずつ改善し、展開していければと思います。今回の研修はとても本質的なところを問い直すセンテンスに溢れていたため、今後私たち自身が現場で活動する中で、実感としてフラッシュバックしてくることで確かなスキルになると感じました。

●「何冊もの本で説明するような内容が一目で分かるのが美術」「美術館・博物館は知識をつなげる場所、試せる場所」という言葉が印象に残っています。文化財の可能性をさらに感じました。自館の展示品をさらに見直し、学芸員と連携してワークショップを考えたいと思います。



博物館マネジメント人材育成研修事業
(学芸員技術研修会)

① 「ユニバーサル・ミュージアム」

■ テーマ

「無視覚流鑑賞法とは?」「見常者と触常者とは?」「ハンズオン展示の意味は?」「なぜさわることが必要なのか?」など、ユニバーサル・ミュージアムの疑問を講義とさわる体験を通じて学びます。

■ 講師

広瀬 浩二郎 (国立民族学博物館 准教授)

■ 開催日時

2019年1月23日(水)10:00~17:00(9:30~受付開始)

■ 開催場所

長崎県美術館(長崎県長崎市出島2-1)

■ 内容

10:00 自己紹介 10:30 講義「自分史と人類史の往還-「無文字文化」の沃野を歩く-」 12:00 昼食 13:00 グループワーク1「無視覚流鑑賞法の体験(1作品目)」 13:30 グループワーク2「無視覚流鑑賞の記録記入・共有」 14:00 グループワーク3「無視覚流鑑賞法の体験(2作品目)」 14:30 グループワーク4「無視覚流鑑賞の記録記入・共有」 15:00 休憩 15:15 演習1「グループで話したことを全体に発表」 15:45 グループワーク5「見ながらさわろう」 16:10 ふりかえり 16:20 演習2「広瀬先生に何でも相談してみよう」 16:40 講義「無視覚流鑑賞の極意六箇条」 17:00 終了

■ 受講者数

12名(福岡4名、長崎7名、鹿児島1名)

■ 事後アンケート

質問1

午前・午後の広瀬浩二郎先生の講義・コメントから学んだことは何ですか?

● 答えがわかることより、考える時間の方が大切であり、記憶に残るとい言葉が心に残りました。また、現代社会では80%を視覚に頼っているものの、江戸時代より前の識字率が低い時代には、もっと別の感覚を使って生きていたという話が面白く腑に落ちました。「鈍ったり失われつつある感覚を呼び戻す」ために、特に幼少期の子どもたちには常々五感を使った経験をさせたいと思うところがあるので、この方向性でしばらく色々実験してみようと、方向性を確認することができたように思います。

分かりやすさばかりが求められる時代において、「多少分かりづらさがあっても、一緒にやってみましょう。」というユニバーサルミュージアムに対する広瀬先生の考え方にも、共感しました。

● 触察は時間がかかる。時間をかけることで愛着がわく。現在の学校教育では、早く行動する、答えをすぐに出せることに力点が置かれる傾向にあるが、時間がかかったことやかけたことの方が自分の財産となる。考える時間が記憶に残ると言われたことにとても共感しました。教育、子育ての根源はそこにあると思ったからです。

● 今回の講義では、「【感覚の多様性】を尊重する」とは実際どういうことなのかを学べたように思います。「無視覚流」鑑賞法や点字パンフレットのように、それぞれの

立場で楽しむことができ、受け取る情報が異なるからこそコミュニケーションツールとして機能する仕掛け作りは、これまで私に無かった発想で感銘を受けました。

質問2

午後の「見ないでさわる」そして「その体験を書き出し交換する」、その後「見ながらさわり、意見交換する」という流れから学んだことは何ですか?

● 見ないで触っているとき、明らかにグループ4人の中に連帯感のようなものが芽生え育まれていくのを感じました。あえて言葉にしなければ伝わらないので、コミュニケーションを積極的にとろうとする意識が生まれていたように感じます。

また、視覚に頼らなくても、案外私たちは作品に深く迫ることができるのだなというのが実感としてあり、面白かったです。これだけ五感を使いながら作品とじっくり対峙したことで、作品への思い入れが強くなり、しっかりと記憶に刻まれました。

これらの一連のプロセスを通して、この鑑賞会は障害の有無に関わらず、楽しむことのできるものだと強く実感しました。

● まず、「見ないでさわる」と自分の中で形が浮かびます。その形から自身が今まで目にしたことがあるものの像が浮かび、動作をしていて情景が浮かびます。色は意識して思い浮かべないと触っただけでは感じ取れませんでした。他の人とさわっているものの意見を出し合ったとき、自分と違う見方をしている人の意見を聞くと、その像が頭の中に描かれるのがおもしろかったです。(一匹のネコが座っているイメージだったのに、このあたりにもう一匹分頭があると言われると頭の中で思い浮かべてしまいました)

また、話を聞いてその像を思い浮かべその場にいる人たちで共有する状況は、落語を聞いているときと同じような感覚になりました。見ないでさわる鑑賞法は、視覚的に見て鑑賞するときよりも自由な見方ができるように感じました。また、他者の意見も、答え(?)がわからないせいか、受け入れやすくなったように思います。「見ながらさわり、意見交換をする」では、自分が「見ないでさわった」作品についてはじっくりさわって、見て、答え合わせも含めてしっかりと鑑賞したものの、「見ないでさわる」のときに触れなかった作品については、あまり興味を持てなかったです。

さらに目で見たときと見ないでさわったときでは作品の大きさにギャップを感じました。目でみるより見ずにさ

わったときのほうが作品が大きく感じました。

● まさに暗闇効果を体験し、初対面の人とも情報を共有することで、一体感が生まれた気がします。見えないことで普段の思考とは違う感覚で作品を味わい、点から面をつなげていくことで作品の全貌を模索していく作業が新鮮で別の感覚をととても刺激された感じがしました。

質問3

今回の研修会について、参加して良かったなあ、今後自分の館でこんなことができそうだなあと思う点があればお書きください。

● 今回体験した無視覚流鑑賞法は、自分にとって全く新しい体験で、作品だけでなく自分自身とも向き合う機会になったように思います。絵画作品での実践方法は検討中ですが、講義の際に見せていただいた、点字を活用した展覧会パンフレットは今後当館でも取り入れたいと考えました。

● VTSを用いた鑑賞プログラムは日常的に行っていますが、作品によっては、今回のような鑑賞方法も組み合わせることで、より深く楽しい鑑賞ができるように思いました。実は前回、研修会に参加した後、いくつかテストケースを重ねていたのですが、忙しさにかまけて滞っていたプログラム開発…。今回受けた刺激をベースに、また新たな気持ちでがんばろうと前向きな気持ちになることができました。

● 音訳と朗読があり、それぞれの役割が異なる点を知る事ができて良かったです。小学生に展示室を案内するときに、自分が持つイメージを相手に伝えがちだが、音訳のように正確な情報を伝えることで、受け手がイメージを構築していくことも重要だと思いました。

● アイマスクをして何かを試してみるという行為に興味はあったものの、今回実際に体験してみて想像以上にスリリングでおもしろいと思いました。もし自分の館で何かするのであれば、焼き物のレプリカがいくつかあるので、それをアイマスクをして実際に触り、展示品から触ったものを見つけるというプログラムができると思いました。



博物館マネジメント人材育成研修事業
(学芸員技術研修会)

⑧「博物館リニューアルと照明計画」

■ テーマ

「リニューアルに当たって照明計画はどうすればいいだろうか?」「学芸員と財政担当者、設計施工業者との折衝で留意することは?」などの疑問を、リニューアルを終えた「熊本県立美術館」の事例から学びます。

■ 講師

藤原 工 (株式会社灯工舎代表取締役)、
林田 龍太 (熊本県立美術館参事)

■ 開催日時

2019年2月12日(火)10:00~17:00(9:30~受付開始)

■ 開催場所

熊本県立美術館(熊本県熊本市中央区二の丸2)

■ 内容

10:00 自己紹介 10:30 講義1「展示照明-基礎からライティングまで」(藤原工先生) 12:00 昼食 13:00 見学1「照明器具による見え方、スポットライトの見比べ」
14:00 講義2「博物館リニューアルに当たっての照明計画の留意点」(藤原工先生) 15:15 休憩 15:30 報告「熊本県立美術館のリニューアルについて」(林田龍太参事) 16:45 見学2「一階展示室」 17:15 見学3「二階展示室」 17:30 ふりかえり 17:40 終了

■ 受講者数

31名(福岡7名、佐賀1名、大分3名、熊本11名、長崎3名、鹿児島3名、沖縄1名、鳥取1名、京都1名)

■ 事後アンケート

質問1

午前・午後の藤原先生の講義、館内見学でのコメントを聞いて、印象に残っている事をお書きください。

●照明が違うだけで、生き生きと見えたり、また熟れすぎたように見えたり、同じ作品が違う見え方をしたことが印象に残りました。

●LEDはメーカーによって演色性や特性が異なるため、LEDを導入する時には波形を確認するなど、値段や機能だけを見て決めてはいけないということ。

●実際にスポットライトの違いをメーカー別に見せていただき、驚くほどわかりやすく理解することができました。

●パナソニックの蛍光灯照明器具の生産中止の件もふくめ、LEDへの移行が切迫したものだということがいちばん印象に残りました。また、なかなかその違いを見分けるには困難が伴いましたが、各社のスポットライトを見比べる演習も印象に残りました。

●始めは専門用語が数多く出てきて理解が難しかったですが、LEDになったからこそ留意すべき点について新しく知ることができて良かったです。年間累積照度の

日数は単に数として覚えていたところ、改めてどの様な仕組みであるのかを確認できました。

作品を正しく見るということについて、講義や館内見学で把握したつもりでしたが、最後に自分の眼で判断するということの難しさを痛感しました。数値で出すことの大切さや作品の性質によって正しく照明を使うことの必要性を身に染みて感じました。それだけでなく展示や館全体のバランスも必要であることもまた、大切であるとの言葉が印象的でした。

照明器具を一様に何種類も比較対照できる機会は滅多にないと思われたので、非常に有意義な時間であったと深く印象に残っています。

●LED照明はメーカーや製品ごとに性能・性質が様々であることがよく分かった。

照明のリニューアル時、技術者には要望を全部言うべきと言われていたことが印象に残っている。予算や時間の制約のなかで、つい遠慮や妥協をしがちだが、まずは要望を伝えてみることは大切だと思った。

●実際に絵画に照明を当てて見比べることで、ずいぶん印象が違うことが分かり非常に興味深かった。

色温度や演色性が高い照明を選び、より正しい色を見てもらうことが基本であり理想だが、次のステップとして、展示物や展示のコンセプト合わせた照明を選べるようになることも必要であると感じた。

質問2

熊本県立美術館の事例報告(林田学芸員)を聞いて、印象に残っている事をお書きください。

●設計事務所、現場の学芸員、予算管理者、すべての要望を調整して妥協点を見出していくのは大変骨の折れる作業に思いました。

●工事に至るまでの過程の複雑さと苦勞、設計業者との調整の困難さがよく分かりました。

●重いスポットは使いづらいことや、タブレットの充電を忘れがち、タブレットを落としそうになるということは、一見細かいことだが、ライティング作業をするのは展覧会開幕間際で余裕がない時期。操作性の問題は無視できない大事なポイントだと思った。

質問3

今後の「博物館リニューアルと照明計画」について、留意したいことは何ですか。

●学芸員、設備、経理とチームをつくり、日程に余裕を持ったスケジュールを組み、リニューアルに臨みたい。

●現在、ライティングレールの取付工事について見積を取ったのですが、頼んでいないスポットライト込みで提出されました。今日学んだ照明についての知識がなければ、業者任せで発注していたかもしれません。

●リニューアルの機会が訪れた時に、館としての希望を明確に提示できるよう、日頃から照明についてもっと高い意識を持つ必要があると思います。

●LED化を急がなければならないことは確かですが、すぐに取り組むことはやはり難しく、それでも準備をしておかないといけないと思いました。照明についての情報を集めておく必要性を感じました。

●今の展示状況をカメラに収めておき、照明のリニューアル時に展示事例を示し希望を伝えることを覚えておきたい。日頃の作業で感じる照明の不満や、どうすれば上手くいくかを記録しておく役立つそうだった。

また、今後、色温度は自在に変えられるようになっていくからこそ照明の使い方はいっそう難しくなっていくようなので、会場全体のバランスや個々の作品に適した照明を判断できる目を養わなければいけないと思った。

●理想とするリニューアルの構想を持っていたとしても、予算的、時間的な制約、そして実際の施工状況によって、必ずしもうまくいかないということが分かった。

さらに当市においては、文化財保護行政や博物館活動に対して縮小を迫られている状況にあるので、仮にリニューアルが可能であってもかなり制限のあるものになっていくと思われる。したがって、今回の研修で学んだことをできるだけ職員間で共有するようにし、人事異動があっても引き継がれていくよう、可能な限り努力していきたいと思った。

7-8



⑨「著作権」

■ テーマ

「どんな情報が著作権で守られるのか?」「どんな利用に著作権は及ぶのか?」「何処まで似れば侵害なのか?」「PD(パブリック・ドメイン)とは?」など。日ごろ文化芸術・教育に関係する皆さんが悩まれている著作権に関する考え方、対応法を学びます。

■ 講師

福井 健策 (弁護士、ニューヨーク州弁護士、
日本大学芸術学部・神戸大学大学院客員教授)

■ 開催日時

2019年2月25日(月)10:00~15:00(9:30~受付開始)

■ 開催場所

熊本市現代美術館(熊本県熊本市上通町2-3)

■ 内容

10:00 講義1「著作権は何に生じる?著作権が及ばない情報など」 12:00 昼食 13:00 講義2「パロディ・二次創作は?アーカイブの挑戦と権利の壁」 14:30 演習「ここは聞いておきたい!福井先生に何でも相談してみよう」 15:00 終了

■ 受講者数

45名(福岡7名、熊本30名、長崎1名、鹿児島3名、山口2名、
広島1名、大阪1名)

■ 事後アンケート

質問1

今回の研修会で福井先生の講義から学んだことは何ですか?

●著作権の基本的な事項を押さえつつ、具体的な事例を紹介いただきました。著作権侵害か否かの判断は明確な基準がないだけに個々によって意見が分かれたことがとても印象的でした。現場で判断に迷うときは複数人の意見や専門の方の意見を聞くこと、著作権者への確認を丁寧に行うことが著作権侵害の予防になると感じました。また、法律改正など常にアップデートされる情報にもアンテナを張る必要性を再認識しました。「著作権」に対して恐れすぎず、構えすぎず、都度的確に対応していこうという心構えを学びました。

●著作権や肖像権に厳しいご遺族もいらっしゃるため、著作物の使用、許認可に関してかなり慎重になっていましたが、ルールに沿って正しく使用すれば怖がることはないと分かり安心しました。

●著作権は身近にあるにも関わらず、先生の講義を聞いて知識・関心不足であったと感じました。

著作権は「著作者の経済的利益を害さない為にあるもの」というイメージでしたが、そもそもの本質は「文化の発展のためにある」ということ、そして著作権侵害か否かについて考える際も、経済的利益に注目してしまいがちですが、何の為の権利なのか?という本質を念頭に置いて、対象物を分解して権利別に考えるということ学びました。理論を頭で理解するだけでなく、実例を用いてお話しして下さったので今後に活かそうです。

●講義を聴講する前の自身の理解がいかに漠然としたものであったかということに気づかされ、著作権・著作物に対する理解が大いに深まりました。博物館は社会教育施設であるが法律でいうところの常設の教育機関ではないことは初耳でした。また、記録写真としてイベント風景を撮影しポスターやチラシ、広報に使用する機

会が多くあるため、肖像権に関する様々な事項を学べたことは、大変有り難いことでした。

●今回の研修会で、著作権の意義や著作権が及ぶ範囲、そして除外される範囲、著作権によく似た商標権など図書館や博物館における活動の中で関わってくる諸々の権利を学ぶことが出来ました。

良かれと思ってやっていることが意図しないところで侵害してしまう可能性のあるポイントをおさえて著作権侵害をしないように心がけること、きちんと著作権を理解し著作権を遵守するあまり知的好奇心や教育活動が萎縮しないように活用していきたいと考えられるようになりました。さらに引用に関しては明瞭な区別、補足レベルであること、出典の書き方などのポイントはお問合わせが多い問題でしたので、今後の教育普及活動に生かしていきたいと思います。

質問2

今回の研修会を受けて、今後、自館はもちろん、他館そして団体、個人の活動で気をつけたい著作権のポイントは何ですか?

●著作権は創作的な表現に対して生じる権利であること。著作物を使用する際は、著作権者への許諾確認が必要となる。ただし、①私的目的(個人的に家庭内で使用する等)の複製②軽微な映り込み③引用(目安として全文の10%以下)④図書館等(司書の在籍する博物館含む)での資料デジタル化、アーカイブのデータベース化、検索サービス⑤美術館(原作品展示者)での観覧者への作品解説⑦紹介のための小冊子掲載、作品上映(館内タブレット等)、配信(作品展示期間に限った館ホームページへの展示作品紹介等)※2018年改正、などの場合は例外的に許可を必要としない。

著作権の保護期間:TPPによる延長没後50年→70年へ。戦時加算:戦時中に著作権を有していた著作物に対し、保護期間の延長を求めるもの。

●著作物には複数の著作権が付与されていること。著作物を「分解」することで許認可もれを防げること。

●2000年の「スイカ写真事件」から2008年の「博士イラスト事件」の判決から伺えるように著作権に対する考え方も日々変わってきており、特に最近ではネット検証・炎上など、作品よりも批判だけが大きくなったりと、著作権に関する問題は、これからも意識して情報収集をしたいと思いました。

●広く一般から著作物を応募する際の募集要項や審査についても著作権の観点から検討が重要であることな

どから、博物館活動に関するさまざまな事項について著作権の観点からも検討をしていくことの必要性を痛感いたしました。

●「許可のいらない例外」における誤った解釈をして著作権侵害にならないよう気を付けたいと思います。職員が著作権をしっかりと抑えておくことで、教育活動の推進と活動の後押しになると思います。

「疑似著作権」は非常によく直面する問題なので、著作権でないことを踏まえつつ過剰な要求に対した訳も分からず従順であるだけでなく、円滑な折り合いをつけられるよう対応していきたいと思います。

質問3

今回の研修会について参加してよかったなと思う点があればお書きください。

●著作権について考える際、個々の事例により様々な角度から考える必要があるとわかりました。具体的な事件の判決紹介、研修会での質問に対する福井先生の回答から、各事例が含んでいる要素を分解して考えるというアプローチの仕方を学べたことが一番の収穫であったように思います。

また、2018年に改正された著作権法の具体的な内容について知ることができ、特にホームページ等での発信など例外措置の拡充は、現場の実務に即つながる情報でした。大変勉強になりました。

●著作権にかかる法律や環境が年々変更されていることを知り、自分たちの知識や情報の古さを自覚できた点。今後は福井先生のTwitterやコラムで最新の情報を勉強させていただきます。

●著作権侵害は「怖がりすぎると何もできない、でも意識が緩むとひっかかる。バランスが難しい」という先生の言葉がとても印象に残っています。著作権は本を読んでも理解しようとしても内容が難しく感じる人が多いですが、先生の話は具体例も多く、非常に分かりやすかったです。また著作権の保護期間について、戦時加算によって古い作品の方が長く残るねじれ現象が起こることや、最近の改定についても学ぶことができてとても勉強になりました。

●著作権、肖像権に関する漠然とした理解が、きちんと整理され落とし込めた点。



博物館マネジメント人材育成研修事業
【連続講座】

「2025年問題に向けた高齢者の健康と博物館の役割」

① 「美術館 de コラージュ療法」

■ 講師

藤掛 明（聖学院大学心理福祉学部心理福祉学科教授）
専門分野：臨床心理学

■ 講師から一言

コラージュは美術技法として創案されましたが、その後カウンセリングや自己啓発にも用いられるようになりました。今回はコラージュの変法であるDOコラージュをとりあげます。実際に「私の2018年後半の抱負・課題」をテーマに体験していただき、言葉の力、イメージの力の双方を味わう時としたいと思います。

■ 開催日時

2018年7月21日（土）10:00～17:00（9:30～受付開始）

■ 開催場所

九州産業大学図書館（福岡県福岡市東区松香台2-3-1）

■ 内容

10:00 自己紹介 10:40 演習1「自分の抱負課題を動詞一語で表現するとしたら（これからの半年に向けて）」 10:55 演習2「DOコラージュづくり」 11:40 昼食 12:40 演習3「DOコラージュ作品の分かち合い」演習4「クラス全体で見学」 14:10 休憩 14:20 講義「コラージュ療法とは」 15:20 演習5「日めくりコラージュ作成」 15:50 グループワーク1「今日の学びを活かした博物館教育プログラムを考える」 16:20 グループ発表 16:40 ふりかえり 17:00 終了

■ 受講者数

24名（福岡18名、佐賀1名、熊本1名、長崎1名、宮崎1名、山口1名、千葉1名）

■ 事後アンケート

質問1

今日、自分のコラージュ作品を作ってみて、何か発見がありましたか。何かを表現した満足感がありましたか。

●自分の内面と向き合う機会となりました。絵画で表現するには難しいものも素材が代弁する事により、ストレスなく気持ち、思いを表現する事ができました。

●集中して作成する面白さを感じました。絵を選ぶ際にイメージがいろいろ浮かんできて（子どもの時のこと、趣味、これからやりたい事）楽しめました。自分の好きなこと傾向が出てきたり、分かったりする気づきがありました。満足度が高かったと思います。

●抽象的なイメージから始めたので、出来上がったもの

を改めて見てみると大変具体的なものとなっていた。自分が今もっている課題にどのような気持ち、思いで向き合っているのかを実感した。自分自身により迫るにもたへん有効なものであることを知った。

質問2

講義を聞いて印象に残ったことと、興味深かったこと、疑問に思ったことがあれば、書いてください。

●わかち合いということが重要であるということを中心に留めました。回想法なども学んで、可能性を広げたいと思います。

●多義性の理解が出来ました。アンサーコラージュの作品を見てみたいと思いました。

地域博物館が人々の「集まる場所」となるため、また「勉強」ではなく博物館が身近な場所となるためのきっかけとして、入り口としてのコラージュがあり得ることがわかり実際にやってみようと思った。

●コラージュの多義性のおもしろさと可能性を感じました。先生の「私たちは多様性の世界に立ち返る必要がある」という言葉がしみしました。



8-1

② 「庭園・美術館 de 園芸療法」

■ 講師

岩崎 寛（千葉大学大学院園芸学研究科准教授）
専門分野：環境健康学

■ 講師から一言

園芸療法とは、植物の栽培といった一般的な園芸活動だけでなく、植物を用いたクラフトや庭園の散歩など、身近な植物を五感で感じることで、ストレス緩和や、落ち込み・不安などの感情を改善するものです。本講座では、園芸療法の事例を紹介しながら、その効果や身近な実践方法についてお話します。

■ 開催日時

2018年9月30日（日）11:00～17:00（10:30～受付開始）

■ 開催場所

久留米ホテル エスプリ（福岡県久留米市東町339）
*当初は会場を久留米市美術館としていたが、台風の影響で休館となり、急遽変更した。

■ 内容

11:00 自己紹介 11:20 講義「園芸療法とは」 12:50 昼食 13:40 園芸療法プログラム1「ハーブ石けん作り」 14:20 休憩 14:30 園芸療法プログラム2「クリニカルアート」 15:10 作品講評会（各班の1人が自分の作品を発表、それを他の人がいいところを見つけてほめる） 15:40 休憩 15:50 グループワーク「今日の学びのふりかえり、岩崎先生への質問を考える」 16:20 質疑応答 17:00 終了

■ 受講者数

22名（福岡18名、佐賀1名、宮崎1名、山口1名、千葉1名）

■ 事後アンケート

質問1

岩崎先生の講義を聞いて、印象に残っていること、興味深かったことをお書きください。

●「環境健康学」を初めて聞き、それは異なる専門を複合した学問分野であるということを知り、興味がより深くなりました。園芸や森林浴、アロマセラピーなどが良いと言うことを漠然と聞いていましたが、園芸療法の効果ということで研究に裏付けされたお話しが納得できました。これからは仕事上でも根拠のある活動ができるようになると感じました。緑と関わることは「体調を本来の良い状態に戻すこと」、このことが大変印象深かったです。

●緑を一定時間見つめると、身体機能の数値が正常値

に近づくという事実がわかったこと。今までは、なんとなく心と体によいとされていたことが実証されていることで、いろいろ腑に落ちました。

質問2

「ハーブ石けん作り」「クリニカルアート」を通して、気づいたことをお書きください。

●アートを通じて会話や作品を楽しむことができるだけでなく、自分自身の固定観念を見直す機会になりました。他人の価値観を知ることで受け入れることが容易になるのでワークにも有益だと考えます。

●第1回のコラージュ療法を受けたあとでの第2回の園芸療法だったので、それぞれの手法の特徴を考えさせられるとともに、通底するものを感じました。岩崎先生が「声掛けが大切」と何度もおっしゃったにもかかわらず、同じ班のメンバーが皆自分の世界に入り込んで作業に没頭してしまうのが面白かったです。

質問3

園芸療法を学んだことで、日常生活で起こっている変化をお書きください。

●身の回りにある緑をかなり意識して「見る」、「感じる」ようになりました。本来とても身近であり生まれた時から接していた筈のものです。生活環境の変化の中で何となく疎になっていたこともあったとふりかえています。

●できるだけ緑がある公園浴をしよう、小さな自宅の庭を癒しの庭にしよう、庭のハーブを積極的に料理やティーに取り入れ香りを楽しもうなど、すぐ出来ることから実践しリラクゼーションを試みるようになりました。心が豊かになっていくような気がしています。

8-2



「2025年問題に向けた高齢者の健康と博物館の役割」

③ 「動物園 de アニマル・セラピー」

■ 講師

山本 真理子（帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科講師）専門分野：介在動物学

■ 講師から一言

動物は医療、福祉、教育など様々な場面で人々の生活を豊かにしてくれています。一般にアニマル・セラピーとよばれており、今なお発展し続けている分野です。アニマル・セラピーとは何か、動物からもたらされる効果のメカニズムに触れながら、動物園での応用について共に考えていきたいと思えます。

■ 開催日時

2018年10月27日（土）10:00～17:00（9:30～受付開始）

■ 開催場所

九州産業大学、福岡市動物園（福岡県福岡市南公園1-1）

■ 内容

10:00 自己紹介 10:30 講義「アニマル・セラピーとは？」 11:30 バスへ移動 11:40 バス出発、福岡市動物園へ 12:30 昼食、園内散策 15:00 集合、大学へ戻る 15:50 グループワーク「動物から得られた自身の効果、園内で発見したアニマル・セラピーの要素を共有する」 16:35 質疑応答 17:00 終了

■ 受講者数

24名（福岡18名、佐賀1名、熊本1名、長崎1名、宮崎1名、山口1名、千葉1名）

■ 事後アンケート

質問1

山本先生の講義、また質疑応答を聞いて、印象に残っていること、興味深かったことをお書きください。

●動物園本来の目的とアニマルセラピーのバランスが重要であるということが印象に残っています。見せる動物園や触ることのできるふれあいコーナーがあることは利用者としては良いことだと思っていましたが、その反面、動物にストレスがかからない対策を行う必要性について気づきが得られました。

質問2

福岡市動物園の探検を通して、気づいたことをお書きください。

●ふれあい広場で小動物を触っていた1人の園児が、輪から少し外れていた別の園児に「○○ちゃん、モルモッ

トかわいいよ、おいで!」と声かけをしていました。動物という存在を通して、人間同士のコミュニケーションも深まるということが実感できました。

●動物園内を5,000歩程度歩いていましたが、全く疲れを感じませんでした。これは歩くことが目的ではなく、楽しむことが目的になっていたからだと思います。また、動物だけでなく、動物園を楽しんでいる子どもから癒しを貰う間接的な効果もありました。

質問3

アニマル・セラピーを学んだことで、日常生活で起こっている変化をお書きください。

●今までは日常生活で動物を目にしても単純に「可愛いな」と思うだけだったが、今回の講義で動物のもたらす効果を学んだことで、それをどう美術館活動へ取り入れようか考えるようになりました。

●以前は犬を飼っていたが、病気で亡くなり、家族で大変悲しい思いをしてから、飼わなくなりました。今回、動物とふれあうことで、心の安定、存在の意義、社会的交流が進むなどの効果があり、ストレスホルモンであるコルチゾールを抑え、愛着を感じるオキシトシンの分泌で信頼感が増すというお話。これからの高齢化社会に向けて医療費の抑制という効果もあるということで、もう一度考え直してみる価値があると思いました。



④ 「博物館 de 回想法」

■ 講師

市橋 芳則（北名古屋市歴史民俗資料館長）
専門分野：博物館学

■ 講師から一言

回想法は、地域に暮らす高齢者を元気にしていくプロジェクトとして活用されています。博物館と高齢者ケア・認知症予防・健康推進などを推進する福祉関係の部局とが連携を図った「思い出ふれあい(回想法)事業」を2002年から実践しています。

■ 開催日時

2018年11月17日（土）10:00～17:00（9:30～受付開始）

■ 開催場所

福岡市博物館（福岡県福岡市早良区百道浜3-1-1）

■ 内容

10:00 自己紹介 10:30 講義1「高齢社会と博物館の役割-回想法と博福連携」講義2「回想法ワークショップの試み-博物館資源と人の交流」 12:30 昼食 13:30 2階展示室見学（講義を受けて、展示室で回想法プログラム開発に活用できそうな博物館資源を探す） 14:30 休憩（1階講義室へ移動） 14:40 グループワーク「博物館資源を生かした回想法プログラムを考える」 15:20 休憩、2階展示室へ移動 15:35 回想法プログラム発表会 16:35 1階講義室へ移動 16:45 ふりかえり 17:00 終了

■ 受講者数

30名（福岡25名、佐賀1名、長崎1名、宮崎1名、山口1名、千葉1名）

■ 事後アンケート

質問1

市橋先生の講義、また質疑応答を聞いて、印象に残っていること、興味深かったことをお書きください。

●①息子さんの25年間の使用したものをすべて保管しているという事。

②先月購入し、めちゃくちゃはまっている「昭和少女ときめき図鑑」の作者と知って、感動しました。この本は、毎晩就寝前に開いて楽しんでいるので、作者の講話を聴けて、ますますこの本が好きになったし、市橋先生のコレクター魂に感激した。本に登場している昭和グッズはすべて市橋先生のコレクションとお聞きして、北名古屋市の博物館にぜひ行きたいと思いました。

●興味深かったのは、いきいき隊というボランティアが回想法を行い地域の中で役割を担っている点です。高齢者は役割を持つことで、人前に立つときは服装や身だしなみを整えたりして生活にメリハリが生まれていることがたいへん興味深かったです。

質問2

福岡市博物館の探検を通して、あなたに起こった回想をお書きください。

●博覧会「よかとびあ」の展示の前に置いてあったアルバムの写真を見て、バブル期の記憶（ワンレン・ボディコン・アッシー・メッシー・・・）が蘇りました（笑）いい記憶ばかりではないですが、出てきたのはエネルギーに満ちた良いイメージばかり。面白いものですね。

●私は福岡市に5年間、学生として住んでいただけなので、私の中の福岡市の記憶は新しく、祭りや街の景色は一時的な移住者の立場から見たものでした。年齢や職業、出身地の異なる方たちと市博を探検することで、時代や見る角度の様々な福岡の姿（記憶）と自分が見た福岡の景色が繋がり、私も確かに福岡に住んでいたのだという実感が湧きました。博物館は、移住者がその土地のコミュニティに所属しているという実感を育むのにも役立つのかもしれないと思いました。

質問3

回想法を学んだことで、日常生活で起こった「あなたの博物館の回想」をお書きください。

●回想法を学んでから、日常生活を五感で感じることを意識するようになりました。特に食事に関することは記憶に残りやすく、そのなかでも音と匂いは思い出が浮かびやすいと感じました。当館での昭和の部屋の展示でもより回想を深めるため、かまどの火のパチパチという音、アイスクリーム屋さんのベルの音などを展示に取り入れられたらと考えています。



「2025年問題に向けた高齢者の健康と博物館の役割」

⑤ 「美術館 de 音楽療法」

■ 講師

井上 幸一（福岡女子短期大学音楽科准教授）

専門分野：音楽学/音楽療法

■ 講師から一言

音楽療法は、介護予防や健康増進を含む心身機能の維持・改善、行動の変容などを目的として、高齢者をはじめ幅広い対象に実践されています。美術作品によるイメージを基に、楽器を用いて「音・音楽に包まれる空間」を作り、その響きを共有するミュージック・アクティビティの体験を行いたいと考えています。

■ 開催日時

2018年12月1日(土)10:00~17:00(9:30~受付開始)

■ 開催場所

福岡県立美術館（福岡県福岡市中央区天神5-2-1）

■ 内容

10:00 自己紹介 10:20 講義「音楽療法とは」「音楽行動と社会」「活動内容及び楽器の奏法など」

11:30 昼食 12:30 セッション1「①流れの確認-絵画の鑑賞②絵画のイメージをどう表現するのか話し合う

③使用する音階(音、楽器)、構成、演奏する場所(空間、配置)を決める④試演と準備」 13:40 グループごとに演奏する

14:00 学芸員によるギャラリートーク「コレクション展Ⅲ 特集「おしゃべりな絵画と寡黙な絵画」

14:40 セッション2(学芸員によるギャラリートーク後の演奏)「①流れの確認-絵画の鑑賞②絵画のイメージをどう表現するのか話し合う③使用する音階(音、楽器)、構成、演奏する場所(空間、配置)を決める④試演と準備」

15:30 グループごとに演奏する 15:50 セッション3(展示室にて、参加者全員による演奏)「①流れの確認-参加者全員で方向性、方法を考える②使用する音階(音、楽器)、構成、演奏する場所(空間、配置)を決める③試演と準備」

16:20 参加者全員による発表会

16:30 ふりかえり 17:00 終了

■ 受講者数

26名(福岡23名、宮崎1名、山口1名、千葉1名)

■ 事後アンケート

質問1

井上先生の講義、また質疑応答を聞いて、印象に残っていること、興味深かったことをお書きください。

●音楽療法の「音楽を意図的、計画的に使う」という定

義に、単純に「音楽を聴いてリラックスする」というようなレベルではなく、もっと踏み込んだ社会的なものを感じました。

質問2

福岡県立美術館での「鑑賞とセッション」について、あなたの中で起こった変化(鑑賞方法での気づきなど)、仲間とともに過ごした時間(意見交換や即興演奏、言語的・非言語的コミュニケーションなど)について、感想をお書きください。

●絵画のイメージをグループで語り合う時間、そして構成へと流れていく時間はコミュニケーションが弾み、人と人の距離が近くなり、曲を作り上げた満足感の共有がとて楽しく、チームワークづくりの有効性を感じました。学芸員のお話では作者の背景を知った上での鑑賞の仕方を学ぶことができ、なんとなく観ることとの比較ができました。

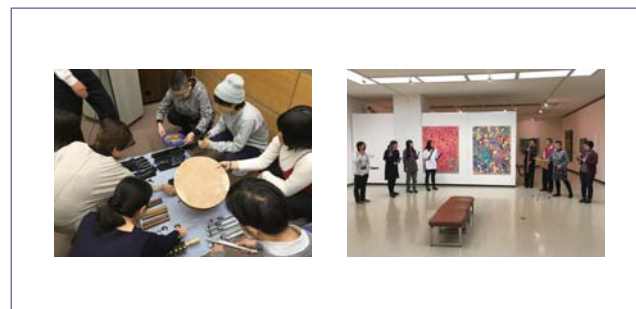
●鑑賞の際、感じたことを伝えるためにまず言語化する必要があるため、観ながら考えていることが、普段の鑑賞と違っていたと思います。また、演奏を行う上でグループの方を観察したり、アイコンタクトをとったりするようになり、ほぼ初対面の方と話し合ったりもし、理論の中に合った「相互交流や対人行動の円滑化」とはこういった事を指していたのかなと感じました。

質問3

音楽療法を学んだことで、日常生活での「あなたと音の関わり」の変化をお書きください。

●生活する上での周りの音がなんでも「音楽」になるのではということを変更して思いました。

●作品を音という非言語で表現する前段階には、なぜそのような表現に至ったのかを言語化するという作業が入ることに気づきました。非言語化するという事は言語化するという事でもあるため、日常生活での気づきをリフレクションするために活用するようにしています。



⑥-1 「高齢者の医療とケア」

■ 講師

有馬 泰治（千鳥橋病院医師、ふくおか家庭医療学センター長）

専門分野：総合内科、高齢者医療

■ 講師から一言

福岡市博多区の千鳥橋病院で、救急・病棟・外来・往診と幅の広い診療を行っています。健康とは病気が無い状態だけを意味するのではないと日々診療で感じます。当院では地域の方の健康作りのためにさまざまな取り組みを行っています。また、地域の専門家の方との新たなネットワークが作れたらなと模索しています。

⑥-2 「2025年問題に向けた福岡市の取り組み-[福岡市保険福祉総合計画]と[福岡100]-」

■ 講師

木本 昌宏（福岡市保健福祉局政策推進部課長

(健康先進都市推進担当))担当分野:保健福祉行政

■ 講師から一言

福岡市では、2025年に向けて、超高齢社会にあってもすべての市民の方が住み慣れた家庭や地域で安心して暮らし続けることができる「健康福祉のまちづくり」の実現を目指し、「福岡市保健福祉総合計画」を策定しました。人生100年時代の到来を見据えた、「ひと」と「まち」どちらも幸せになれる社会をつくるプロジェクト「福岡100」ともにご紹介します。

■ 開催日時

2018年8月9日(木)10:00~17:00(9:30~受付開始)

■ 開催場所

九州産業大学(福岡県福岡市東区松香台2-3-1)

■ 内容

10:00 講師紹介、自己紹介 10:30 講義1「高齢者の医療とケア」 11:40 休憩 11:45 質疑応答

12:30 昼食

13:30 講師紹介、自己紹介 13:45 講義2「2025年問題に向けた福岡市の取り組み-[福岡市保健福祉総合計画]と[福岡100年]」 14:45 質疑応答 15:15 休憩

15:30 グループワーク「支え合う地域づくりのために博物館ができること」 16:20 グループ発表 17:00 終了

■ 受講者数

23名(福岡20名、宮崎1名、山口1名、千葉1名)

■ 事後アンケート

質問1

午前中の千鳥橋病院の有馬医師のお話「高齢者の健康、病院の取り組みなど」からの気づき・発見をお書きください。

●そもそも「美術館・博物館に来ることができない人たちがいるというあたりまえのことを、まずは考えさせられました。そしてその数は確実に増えていくだろうということ。美術館・博物館によるヒト・モノの出前・出張サービスの充実を図っていけるといいですね。一つの例として「回想法」のときに「貸出キット」を思い返しました。病院にも、施設にも、あるいは美術館や博物館の無い僻地にも、こちらから出かけて行くことによって地域で果たせる役割がもっと広がると思いました。

質問2

午後の福岡市役所の木本課長のお話「福岡市総合保健福祉計画、実際の取り組み事例など」からの気づき・発見をお書きください。

●高齢者が一律に支えられる側であった従来の政策から、能力・意欲に応じて支える側へまわるといふ福岡市の政策転換が、これからの高齢化社会へ迎えるにあたり、とても有効であると感じました。



「高齢者教育アンケート」

■ 調査目的

今回のアンケート調査は、「博物館と高齢者」の健康に関して、九州・沖縄の博物館の実態を知るために実施した。

■ 調査項目

平成15年度実態調査(日本博物館協会加盟館対象)及び平成27年度実施調査(北海道博物館協会対象、北海道博物館の青柳かつら氏が実施)に準拠している。このことにより、経年変化及び地域の特性をデータ比較分析することが可能になり、我が国の「博物館と高齢者教育」を考えるための貴重なデータを得ることができた。

■ 実施方法

質問紙法(九州・沖縄地域の博物館297館へ郵送)

■ 実施経過

平成30年5月
アンケート調査項目検討(日本博物館協会及び北海道博物館青柳かつら氏による高齢者対象の調査を分析)
平成30年6月26日
「高齢者向け教育プログラム」アンケートを北海道博物館協会加盟館に実施した「北海道博物館学芸員、青柳かつ

ら氏」への悉皆調査。アンケート項目の統一を図り、北海道と九州・沖縄の比較調査をすることで意見が一致する。

平成30年6月30日

アンケート調査用紙印刷、発送(件数:297館)

平成30年7月28日

アンケート調査用紙回答締め切り(回答件数:161館、回収率54.2%)

平成30年8月上旬

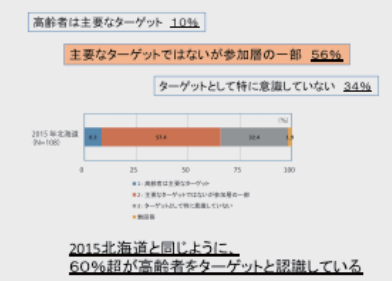
アンケート調査用紙整理、データ入力開始
入力後、平成15年度日本博物館協会調査データ、平成27年青柳氏調査データと比較分析を行った結果をいくつか紹介する。

● 考察

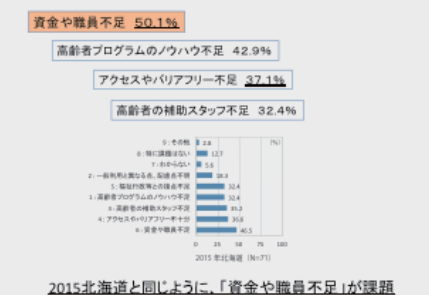
今回の調査結果を見ると、高齢者は博物館に「ボランティア活動など社会参加の場を求めている」ことが分かった。しかし、現在ほとんどの博物館が1人学芸員という状況の中、ボランティア養成に力が注げるだけの体力と資金がないという実態が明確になった。今後は、地域の博物館が合同開講する養成講座や休眠学芸員を巻き込んだ博物館活動など、新たな方策研究が必要になってくると考えられる。



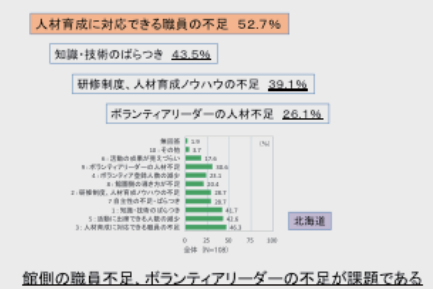
問い 教育普及行事における高齢者の位置づけ



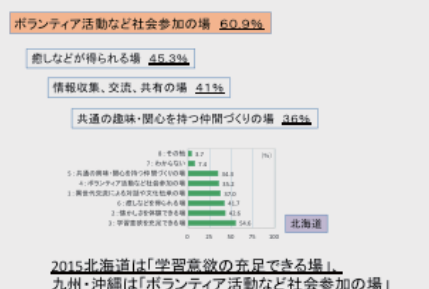
問い 高齢者向け教育普及行事の課題



問い 高齢者ボランティアの課題



問い 高齢者が館園に求めるもの



「ミュージアムカフェ・バス見学会」

■ 目的

文化芸術推進基本計画(第1期)(文化庁平成30年3月6日)第1「我が国の文化芸術政策を取り巻く状況等」の2「昨今の我が国の文化芸術を取り巻く状況変化」で、「美術館、博物館図書館等では、文化芸術の保存・継承、創造、交流、発信の拠点のみならず、ボランティア活動や観光等の拠点など幅広い役割を有している。また、教育機関・福祉機関・医療機関との関係団体と連携して様々な社会的課題を解決する場としてその役割を果たすことが求められている」という提言をもとに、本事業では高齢者等を対象とした「博物館健康ステーション」構築という地方博物館の新たな機能を付加できると期待する「ミュージアムカフェ事業」を展開していくため、福岡県・佐賀県の歴史系、美術系、動物系の博物館や地域のアートスペースなどを6回にわたって巡りながら、その可能性や課題を考える機会とした。

①

開催場所
大牟田市動物園、大牟田市立三池カルタ・歴史資料館
参加者:18名
開催日時:2019年1月12日(土)



②

開催場所
直方谷尾美術館、田川市石炭・歴史博物館
参加者:17名
開催日時:2019年1月14日(月・祝)



③

開催場所
嘉麻市立織田廣喜美術館、碓井郷土館、平和祈念館
参加者:12名
開催日時:2019年1月19日(土)



④

開催場所
佐賀県立博物館・美術館
参加者:34名
開催日時:2019年2月5日(火)



⑤

開催場所
須恵町立久我美術館、須恵町立歴史民俗資料館
参加者:17名
開催日時:2019年2月9日(土)



⑥

開催場所
宗像市郷土文化学習交流館、宗像大社神宝館、花祭窯
参加者:25名
開催日時:2019年2月16日(土)



①「ICOM・九州産業大学ミュージアムカフェ」

■ タイトル

「スアイ・アクソイICOM会長と九州の学芸員が語り合う未来の博物館」

■ 開催日時

2018年11月30日(金)18:30~20:30(18:00~受付開始)

■ 開催場所

博多バスターミナル9階会議室
(福岡県福岡市博多区博多駅前)

■ 主催

九州産業大学、ICOM京都大会準備室

■ 内容

【モデレーター】

緒方 泉(九州産業大学地域共創学部教授)

18:30 開会挨拶 18:35 「ICOMのミッションとICOMが考える未来の博物館像」スアイ・アクソイ(Suay Aksoy)会長 19:00 「ラテンアメリカとカリブ地域事例報告」(サミュエル・フランコ・アルチェ(Samuel Franco Arce) ICOM-LAC(中南米地域)委員長 19:20 「ICOM京都大会について」(ICOM京都大会準備室関谷泰弘企画調整官) 19:45 報告「英国・米国博物館調査で気づいた博物館活動のキーワード」①英国博物館調査と博物館活動のキーワード(九州産業大学美術館 吉田公子准教授)②米国博物館調査と博物館活動のキーワード(福岡市美術館 鬼本佳代子主任学芸主事) 20:10 グループワーク「ミュージアムの課題と可能性」 20:30 閉会挨拶(佐々木丞平ICOM京都大会2019組織委員長)

■ 受講者数

30名(福岡25名、佐賀2名、大阪1名、京都2名)

■ 事後アンケート

①アクソイ会長のお話の中で、博物館を文化交流の場であると同時に、平和への手段として捉えていたことがとても印象に残っています。博物館は知識を享受する場であり、過去から現在、現在から未来へとつなぐ場としてのイメージが強かったのですが、知識を深め、文化を理解し、平和へとつなげる。この「平和」というキーワードは博物館を考える上で、鬼本さんのお話で出てきた「人々の幸せ」とも関連し、重要なキーワードであると思いました。

②学芸員や博物館の役割は社会への献身であり、世界の状況の変化に合わせていくことは、考えが及ぶところでした。しかし、それが人権問題や環境問題にも及ぶという点は、これまでの仕事柄や現在の博物館での仕事内容が、モノを中心にまわっていたということもあったせいか、単にモノからみた博物館倫理のグローバル化という点でしか見ていなかったため、人類が抱える普遍的な

問題にも及ぶと言及されたことに、博物館とその運営に携わる学芸員の役割の幅の広さを認識させられました。

③外国では、かなり博物館などについての理解が進んでいるのではないかとイメージしていたが、教育施設への予算配分や人材不足、文化財の保護など日本でも共通しているような問題があるのだということが分かりました。特に中南米では、民族的な問題や環境的な問題が博物館に深く関わっているという印象を受けました。博物館はつねに地域や社会で現在起きている問題にたくさん目を向けていくこと、地域の公的機関、民間の機関とも連携していく必要があるというのが印象に残りました。

④認知症、メンタルヘルスなど高齢者への対応や博物館の利用において、館や職員自身が、その人達の理解があつてこそ、大きな結びつきになると思われるため、博物館がその教育を職員や地域の人々へ行う環境を整える必要性を感じました。

⑤米国の博物館での高齢者向けプログラムについてのお話で、説明の際、「つながり」「発展」「人々の幸せ」というキーワードが挙げられていました。そのなかでの「人々の幸せ」というキーワードがとても印象に残っています。高齢者向けのプログラムも、博物館における「人々の幸せ」の追求・保障のための取り組みの1つであり、万人に開かれた博物館が行うプログラムの根底に何があるのか、何をもちて人々に向け博物館がアプローチしていくのか、真摯に取り組む姿勢が重要であると感じました。



②「2019九州産業大学国際シンポジウム」

■ タイトル

「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」

■ 開催日時

2019年2月19日(火) 10:00~17:00(9:30~受付開始)

■ 開催場所

九州産業大学グローバルプラザ(福岡県福岡市東区松香台2-3-1 2号館1階)

■ 内容

【司会】吉田 公子(九州産業大学美術館准教授)

10:00開会挨拶 10:10 講演1「英国における高齢者に向けた博物館教育の取り組み-ロンドン・ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーの事例-」ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー /ヘッド・オブ・ラーニング/ジェーン・フィンドレー(Jane Findlay) 11:00 講演2「米国における高齢者に向けた博物館教育の取り組み-ニューヨーク・イントレピッド海上航空宇宙博物館の事例-」イントレピッド海上航空宇宙博物館/シニアマネージャー・オブ・アクセス イニシアティブ/シャーロット・マーティン(Charlotte Martin) 12:00 昼食 13:00 シンポジウム趣旨説明 緒方 泉(九州産業大学地域共創学部教授) 13:05 報告「博物館と高齢者の健康」に関するアンケート結果概要-九州・沖縄を中心として-緒方泉教授 13:25 グループワーク「英国・米国の事例に関する意見交換、質問をまとめる」 14:00 休憩(コーヒーブレイク、名刺交換) 14:30 シンポジウム「博物館と医療・福祉のよりよい関係を英国・米国の事例から考える」パネリスト:ジェーン・フィンドレー /シャーロット・マーティン、指定討論者:藤田千織(東京国立博物館)/五月女 賢司(吹田市立博物館)、モデレーター:緒方 泉 16:00 休憩 16:15 質疑応答 16:50 登壇者から一言 17:00 終了

■ 受講者数

50名(福岡32名、佐賀1名、長崎3名、熊本2名、宮崎1名、鹿児島1名、山口1名、鳥取1名、大阪5名、奈良1名、東京2名)

■ 事後アンケート

以下の1~4について、感想(気づきや発見、気になったキーワードなど)をお聞かせください。

1 英国、ジェーン・フィンドレー氏の事例報告

●ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーの佇まいにまず親近感を感じました。「高齢者に優しい都市」、「健やかな加齢」というキーワード、加齢をいかに健やかにするかという取り組みは単に高齢者の福祉に留まらない幅広い世代に関わる地域社会の質の向上に貢献するであろう可能性を感じました。プログラムの展開に示された5つのキーワードは大いに参考になります。年齢や、民族などの多様性、社会的に孤立する高齢者なども考えさせられる課題でした。

2 米国、シャーロット・マーティン氏の事例報告

●保険制度など社会構造が異なるアメリカでは、資金調達など運営面も含め博物館・美術館と福祉、健康に関わる基本的な考え方が非常に能動的に感じられるとともに、軽いカルチャーショックを受けました。プログラムの実行に当っては、資金提供者、専門家、ボランティアなど如何にネットワークを構築し活用していくかが大きな鍵を握っているようでした。人種や多言語など複雑な社会構造をもつアメリカでは、アプリ提供や電話・郵便を活用する等多様な働きかけの手段を講じている点などは参考になりました。外に出ていくことができない人々に如何にアプローチするかも大切な事だと思います。

3 グループワークでの対話

●グループでは、プログラムの評価について、ボランティアについてなどが気になるテーマとして出されました。シャーロットさんから家族を巻き込むことも大事だと聞きました。また、小さな館で取り組むことの難しさ、館同士の連携の必要性なども話題になりました。

4 シンポジウムの質疑応答

●各グループから出された質問はどれも参考になりました。ボランティアの役割の区別とトレーニング、メンターの存在と役割、来館できない高齢者へのアプローチの工夫、介護する人に対する寄り添いなどさまざまな視点からの理解が深まりました。異なった視点からのプログラムの共有、皆が主体者意識を持つことなど多くの気づきもありました。



「英国調査」

■ 英国調査の日程

● 2018年8月22日(水) バーミンガム

1. バーミンガム博物館
2. バーミンガム科学博物館
3. バーミンガム大学付属ラップワース地質学博物館
4. バーミンガム大学付属美術館

バーミンガムは、ロンドン市内から電車で約2時間。ロンドンに次ぐ第二の都市である。バーミンガム博物館はラファエル前派のコレクションで知られる。バーミンガム大学付属美術館は、ルーベンスなど古典からゴッホ、ピカソなど近代まで美術史を辿ることができるコレクションが魅力。展示室の中に学習室が設けられ、一般向けに様々なプログラムを提供している。

● 2018年8月23日(木)・24日(金) シュロップシャー州

5. アイアンブリッジ
6. アイアンブリッジ博物館
7. プリスト・ヒル・ヴィクトリア・タウン

バーミンガムからテルフォード・セントラル駅まで電車で約40分。バス停・テルフォード駅まで約15分歩く。バスでアイアンブリッジまで約30分。アイアンブリッジ峡谷は、イギリスでは最も早く1986年にユネスコの世界遺産に登録された。アイアンブリッジはセヴァン川にかかる世界初の铸铁橋(1779年)である。この一帯は石炭、鉄鉱石、石灰石などの資源が豊富にあり、産業革命に大きく貢献した。当時の町の様子を再現したのが、プリスト・ヒル・ヴィクトリア・タウンである。堅坑に使われた巻き上げ槽など様々な遺産が遺されており、それらは現在もメンテナンスがなされ動く様子が公開されている。

● 2018年8月25日(土) ロンドン

8. ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー

(インタビュー/ジェーン・フィンドレー氏)
ロンドン南部、サザーク区に位置する。世界的に早く1817年に

開館し、コレクションはレンブラントをはじめとする17~18世紀のオールドマスターによって構成されている。ラーニングの部署でトップを務めるジェーン氏は、子どもや家族、学校団体、高齢者を対象に様々なプログラムを企画提供している。私たちが訪れた日は、シニアボランティアによるギャラリートークが開催されており、生きいきとした語口とi-padを用いた参考資料の提示によって、十数人の参加者が鑑賞を楽しんだ。

★ ロンドン市内から電車でNorth Dulwich駅まで約15分。下車後、徒歩約10分。
または駅から美術館前までバスも運行。

9. デザイン・ミュージアム

2016年にリニューアル・オープン。常設展は無料。デザイナー、ユーザー、メーカーの3つのキーワードでモダンデザインの発展を展観できる。

★ ロンドン市内、地下鉄ハイ・ストリート・ケンズントン駅下車。徒歩約10分。

● 2018年8月26日(日) ロンドン

10. ロンドン大学付属美術館コートールド・ギャラリー

2018年9月3日から休館。Courtauld Connectsというプロジェクトを準備中である。

★ ロンドン市内、地下鉄テンプル駅下車。徒歩約10分。

■ 英国調査のメンバー

- 緒方 泉 (九州産業大学)
- 松村 利規 (福岡市博物館)
- 五月女 賢司 (吹田市立博物館)
- 吉田 公子 (九州産業大学美術館)



バーミンガム大学付属ラップワース地質学博物館



プリスト・ヒル・ヴィクトリア・タウン



ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー



デザイン・ミュージアム

「米国調査」

■ 米国調査の日程

● 2018年11月20日(火) ニューヨーク

1. Arts & Minds

(インタビュー/キャロリン・ハルピン・ヒーリー氏、ネリー・エスカラント氏)
インタビューを行ったエル・ムセオ・デル・バリオはイーストハーレムに位置する美術館で、ラテンアメリカのアートを見ることができる。ここでは、認知症を患っている人々を対象としたプログラムを、非営利団体「Arts&Minds」と連携して行っており、この日は同団体の関係者から話を伺った。この団体は認知症患者の様々なニーズに沿ったアートプログラムをミュージアム等に提供し、地域とミュージアムを結びつける活動を実施している。より良い認知症患者向けのプログラムを実施するため、ミュージアムの専門家同士が連携するだけでなく、地域の大学や病院、ケアセンター、文化施設と連携し、常にプログラム内容の充実、改善に取り組んでいる。なお、このことは他施設の高齢者プログラムでも同様であった。

★ 地下鉄6線、103丁目駅下車。徒歩約8分。

2. ニューヨーク近代美術館

(インタビュー/ローレル・ハンブル氏)

ミッドタウンに位置する。近現代のアートを見ることができる。アルツハイマー型認知症を患っている人々とその介護者を対象としたプログラム「Meet Me at MoMA」を2006年から提供し、こうしたプログラムが患者だけでなく周囲の人にもポジティブなインパクトを与えていたことから、2014年から一般の高齢者向けプログラム「Prime Time」を開始した。退職後の人生を送る人々に対し、ミュージアムが様々な学習スタイルに応えることで、既存のプログラムの入り口になり、こうしたことが高齢者の孤立を避ける手段にもなると考えられる。

★ 地下鉄B/D/E線、7番街-53丁目駅下車。徒歩約6分。

● 2018年11月21日(水) ニューヨーク

3. イントレピッド海上航空宇宙博物館

(インタビュー/バーバラ・ジョンソン・ステムラー氏、リンダ・ケネディー)

マンハッタンのハドソン川沿いにあるこの博物館は、1974年に退役した航空母艦イントレピッドを再利用した博物館で、艦船や航空機を展示している。同館では、認知症患者と、その介護者のためのプログラム「Stories Within」を、毎年、春と秋に計7回実施している。このプログラムはニューヨーク近代美術館の「Meet Me at MoMA」を参考にしており、訓練を受けたエドゥケーターのもと、歴史的な写真などを見たり、歌を歌ったり、物語を共有したりして、様々な感覚に訴える体験をする。その他、家から出ることができず、パソコンを使わない高齢者のための電話会議を使ったプログラムや、退役軍人を対象としたプログラムなど、多様な高齢者プログラムを有している。

★ 地下鉄A/C/E線 42丁目ポートオーソリティー駅下車。徒歩約20分。

4. エル・ムセオ・デル・バリオ

● 2018年11月22日(木) ニューヨーク

5. ニューヨーク国立アメリカンインディアン博物館

★ 地下鉄4/5線 ボーリング・グリーン駅下車。徒歩約1分。

● 2018年11月23日(金) ニューヨーク

6. ニューヨーク近代美術館 (ギャラリートーク参加)

7. ニュー・ミュージアム

■ 米国調査のメンバー

- 中込 潤 (九州産業大学美術館)
- 藤田 千織 (東京国立博物館)
- 鬼本 佳代子 (福岡市美術館)
- 小栗栖 まり子 (九州産業大学美術館)



ニューヨーク近代美術館



イントレピッド海上航空宇宙博物館



イントレピッド海上航空宇宙博物館



エル・ムセオ・デル・バリオ



ニューヨーク国立アメリカンインディアン博物館

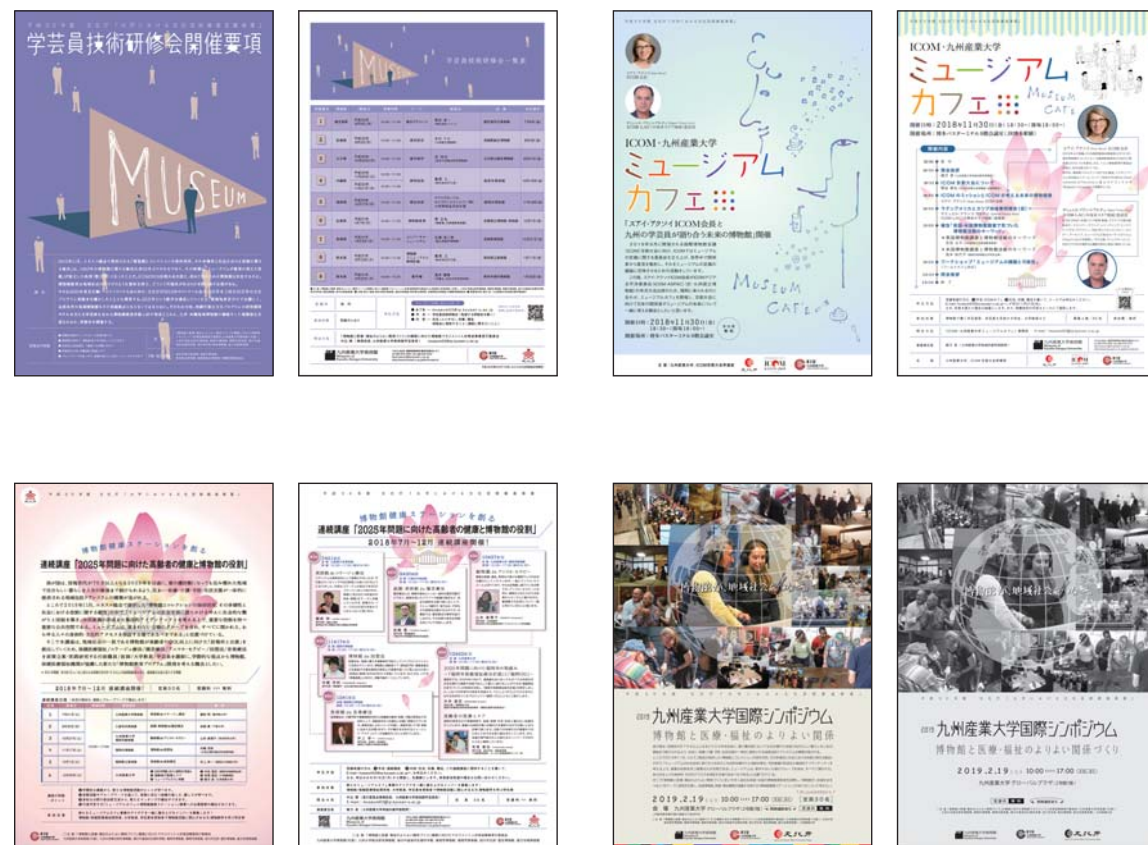
「学芸道」多言語学習教材の開発

博物館学習映像教材「学芸道」の開発

(今回は英語版3本「梱包材の作り方」「茶器の取り扱い」「掛軸の取り扱い」を作成。今後は留学生やインバウンドに向けた日本文化理解促進のための多言語化教材へ発展させる)



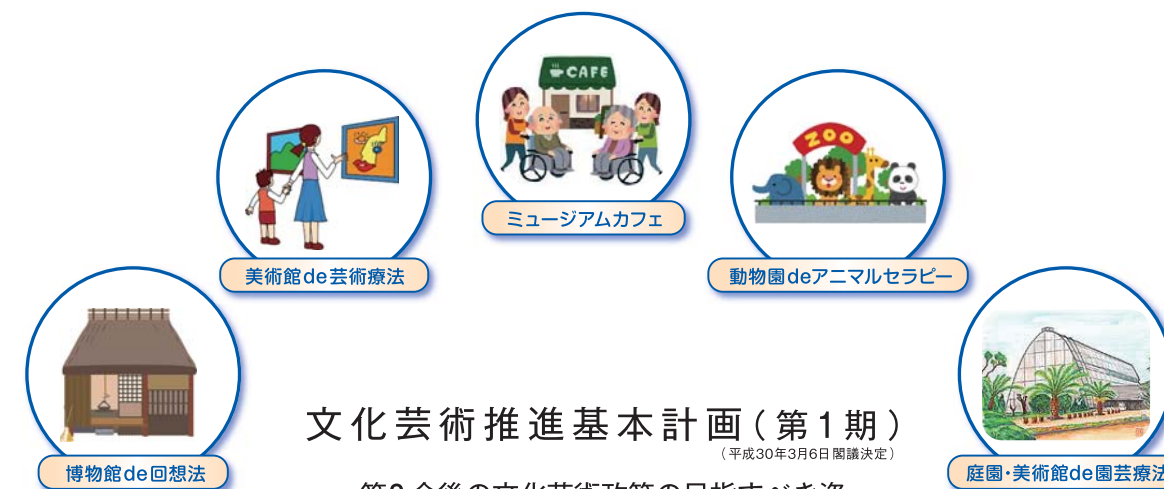
今年度の印刷物



15

概念図

「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」構築に向けた博物館マネジメント人材育成事業



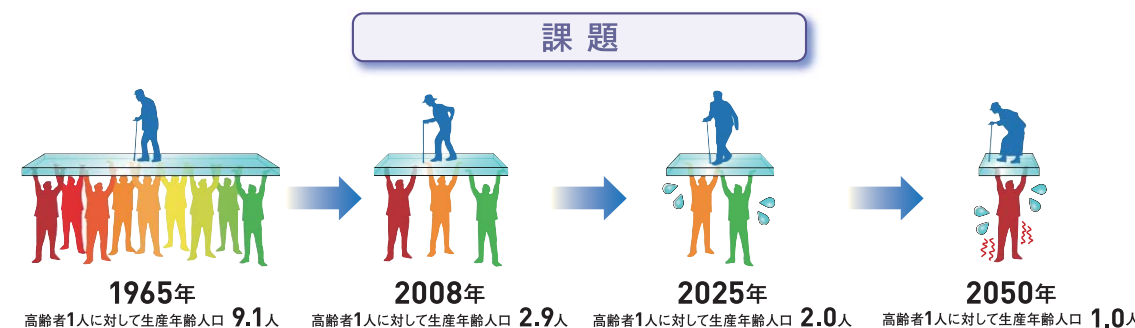
文化芸術推進基本計画(第1期)

(平成30年3月6日閣議決定)

第2 今後の文化芸術政策の目指すべき姿

美術館、博物館、図書館等は、文化芸術の保存・継承、創造、交流、発信の拠点のみならず、地域の生涯学習活動、国際交流活動、ボランティア活動や観光等の拠点など幅広い役割を有している。また、教育機関・福祉機関・医療機関等の関係団体と連携して様々な社会的課題を解決する場としてその役割を果たすことが求められている。

(目標1「文化芸術の創造・発展・継承と教育」から)



解決のための方針

2025年問題 = 75才以上の後期高齢者が国民の1/4を占める

厚生労働省発表のデータより算出

住み慣れた地域で、いつまでも安心して暮らし続けることができる地域社会の実現
地域包括ケアシステム(医療・介護・予防・住まい・生活支援)の構築

地域医療に社会資源を活用 = 地域博物館の役割を考える
予防・生活支援: 地域博物館が高齢者の居場所と出番を創出

16